

光  
明  
生  
活

「此肉体を転ぜずしてたゞ天然の意志を転じて弥陀の新生命に入り弥陀大我の中の自己にして弥陀を離れたる個人なるに非ざるを知り此身は弥陀の一切処に周徧せる性能を実現せんが為めの身なるを意識して弥陀の意思実現として行動せば足るのみ」

「如来の光明被むりて信心開発すれば此の身の上にはかはりし事無之候へ共心の奥底に最靈なる光明の照すありて心は広くゆたかにして常に法悦の樂みを感じ申候恁の如きの心の状態に相成候ことを光明生活と申候」

「ミオヤより君に選みて授け給はりし職務なれば大ミオヤに感謝の意を以て悦び勇みて業に従事する時は非常に大なる力を以て満足の念を以て勤る事ができます」

## 仏子の自覚

如来は吾等衆生の本覚の大明おやで在ますことを信じられた時には随つて吾等は眞に之れ仏の子であると云ふ自覚が生ずる訳である。併し唯仏典に一切衆生は悉く仏性を有すとの文を読たばかりでは仏子の自覚とは云へぬ。全く精神の奥底に伏在せる靈性のみおやの光明に喚發されて恰も鶏の卵子が謂ゆる啐啄同時に殻の中より開裂して雛子と現れた時に初めて我は仏子であるとの自覚が生ずる。我等は仏の子であると同時に人の子である有ゆる罪惡の種子を悉く持て居る。動物性の煩惱を皆持て居る。我等の動物性は犬や馬の如くに唯本能的に素朴に正直に犬は犬、馬は馬としての本能とは違つて我等は知識が発達して居る丈に非常に狡猾なる最も兇惡なる行為を為す処の動物である。之を儒教には人欲の性と云つて居る。此の人欲の性と云ふものは実に自分勝手なもので各自も自分の日々に起り来る心の云何を返照したならば如

何に自分びいきの目で視ても到底善良のものは思はれますまい。人間は悪い方へ発達して居る丈また善い方へも働かすれば如何なる善事も為し得るのである。是は人の子たる動物性を有して居ると同時に法身より受け得た仏性即ち靈性をも併せ持つて居るからである。併しながら倫理の講義を聞いた位では心の奥底に伏在して居る靈性は開發すべきものではない。真にみおやをみおやと信じてみおやの靈光に触れ靈力に同化するゝことに依て初めて仏子の自覚も出来靈性の開發もなし得らるゝのである。寔に仏陀出世の本懐もこゝにあるのである。然らば我等は如何にして此自覚に入ること出来るかとなれば是に就て二方面から親と子の道がつくと思ふ。一面は聖道的即ち法華經に如來は一大事因縁を以ての故に世に出現し給ふ。其の一大事因縁とは即ち人々本具の仏知見を開きて仏の正道に入らしむることである。換言すれば各自の奥底にある仏性を開きて仏子の自覚を與んが為に仏は世に出現せられたと云ふ。又、梵網經には人の仏性を開きて仏子の性徳を働かせんには仏の憲法に基きて父の家督を相続

させんとの聖意にて説き明されてある。經に、衆生仏戒を受くれば即ち諸仏の位に入る位大覺に同じ已りぬれば眞に是れ諸仏の子なりと。茲には全く父の憲法に基けば家督を相続させると云ふ意味である。前の両法共に道理の上には子として父の相続は出来易いやうなれども、動もすれば唯理論の上にも我は仏子なり否我已に仏なりと、いかにも自覺に達したる如くに云ふけれども事實は却々許し難い。故に一方の宗教的方面よりすれば、事實の上に還つて入り易い。其は如来は慈悲深き母としての恩寵を以て子たる吾々の靈性を養育して頂くと云ふ意味を以て親子の自覺に入るからである。又云何にして慈母の恩寵を被むるかと云へば、如来は慈悲のみおやと聞き、みおやは我等衆生の迷子を愍み南無阿弥陀仏と我が名を呼び我れを頼めと恰も初めて産れし児が未だ母の面だに見ることは出来ぬけれども唯啼く声を便りに乳房を嘔ましむるやうに我等が未だ如来の慈悲の温顔は瞻えぬけれども唯々みおやの慕しさに一向御名を呼ぶ時は漸々に信心増長して縱令尊顔を拜むには至らざるも頓てみおやに親みて現に此

に在ますことを信しんずることを得う。經きやうに如に來らひの威ゐ神じん功く徳とくを聞ききて日に夜ちやに稱しやう念ねんして至し心しん不ふ
 斷だんなれば、光くわう明みやうに遇あふことを得えて三く垢せう消じやう滅めつし歎くわん喜ぎ踊やう躍やくして善ぜん心しん生しやうずと。また觀くわん經きやう
 には若もし念ねん仏ぶつするものは當まさに知しるべし此人このひとは是これ人にん中ちゆうの白びやく蓮れん華げである觀くわん世ぜ音おん大だい勢せし至し其そ
 の勝しやう友ゆうとなる當まさに仏ほとけの位くらみに坐ざすべきなり故ゆゑいかんとなれば如に來らひの御み子こと生うれたからで
 あると。此この意ごは若もし真しんにみおやを憶おく念ねんして離はなれざるものは身みは人にん間げんにありても其その心こころ神しん
 は清きよき仏ぶつ子しである。白びやく蓮れん華げは淤どろ泥なかの中なかより出いでても其その潔けつ白ぱくなること世よに比くらぶべきも
 のなき如ごとく凡ぼん夫ぶの汚きたき心こころよりも聖きよき仏ほとけの心こころが生しやうずるのである。實じつに希けう有ゆうである即すなはち如に
 來らいを念ねんずるが故ゆゑに能のう念ねんの心こころも仏ほとけとなる。世よに是これ程ほど聖せいき靈れいなる人ひとはない。されば心こころの聖きよ
 き聖せい者じやくわん觀ぜ世おん音だ勢せし至し其そに我わが友とも達だちとして愛あいし給たまふ。已すでに如に來らひの子こと生うまれたのである故ゆゑ
 に頓やがて諸しよ仏ぶつと同おなじく無む上じやう正じやう覺がくを得うべしとの意ごである。然しからば御み子ことしての自じ覺かくのみで
 なく其その内容ないに於おいて最もつとも親おやと子ことの親しん密みつなる血ちが通かよつて居ゐる。聖せい善ぜん導だうは念ねん仏ぶつ者しやと如み來ら
 との間あひだには凡すべてよりは親しん密みつなる愛あいと最もつとも近ちかき縁えんと又また強つよき力ちからとを以もつて固かたく結むすんで離はなれ

ぬ關係を為して居ると明されてある。斯くの如きの因縁を以て仏子の自覺と共に親子の親密なる愛を以て繋ぐことを得る内容までも御子となり得られるのである。

## 光 明

この光明は我等衆生の心靈を復活し靈に活かす処のミオヤの靈力にて恰も太陽の光に依て我等が肉体の生命の活かさるゝ如く光明とは衆生の信仰に對するミオヤの恩寵にて一大靈力とも不可思議功德とも名けらる。如來の光明は眼には見えぬけれども一心に念仏する時は其光明に觸れ自然と心が一変して苦を抜き樂を与へ悪心を轉じて善心となり迷を除きて悟を得しむる等の不思議の功德が備つて居る。喩へば太陽の光りは地球上有ゆる生物の生命より一切のもの悉く其光りを被らずして活きることは出来ぬ。地上の万物が太陽の力を離れては凡ての働きを失ふが如く人の精神は大ミオヤより受けたる不思議の靈能を有て居るもの、更にミオヤの恩寵を被むりて聖

意に契ふやうに働きて人生の天分を全うし使命を果すことを得るは如来の光明を享  
 くるが故である。故にミオヤの光明は実に無量無辺の種々の方面に亘りて照す徳用  
 である。要を取て云はゞ一切の諸仏聖賢の有ゆる心の働きはミオヤの光明に照さる  
 るに依る。恰も万物が太陽の光に依るが如し。種々の方面に亘れる光明を詳かに  
 十二光に依て説明せば明かに其の不可思議の徳あることを信知されるのである。其は  
 追々に説くことにして今は如来の光明と太陽の光りとに比例して三方面あり光明  
 の作用を説明したいと思ふ。通じて太陽の光と云ふとも物理学には光線と熱線と化学  
 線との三つの能力に分ける如く如来の光明も其に例して三種に分けて智慧と慈悲と  
 威神とを以て其作用を説明せん。

一、智慧光を太陽の明線に比すれば太陽の明線に肉眼に見ゆる山河大地一切の動物  
 植物に至るまで明かに見ゆる如く、如来の智慧光は一切衆生の智力を照らして万物の  
 真理を明かに知らせる作用で万物には何一つとして理の具はらぬはないけれども人智

慧がないから解らぬのである。有為無為と申して有為とは此の世間の理科学にて研究して居る物理や生理植物杯の凡ての理を明かに知るを有為の智と仏教では名けて居る。仏教で云ふ諸仏菩薩等の理想界の玄深の真理を悟るを無為智と名く。有為無為一切の真理を照すのが智慧光なれども今は宗教の必要なる我等が信仰上の真現を覺らして下さる方を主とす。一心に念仏して光明に遇ふ時は縦令学問なき人にも自然と能く仏智に相應する智慧が開かれて正見となり、世間門には善悪因果の理を信じ進では仏智不思議の理に於て疑はず、其の信解する処が大悟徹底した人と同一に帰する如く是れミオヤの智慧光に照さるゝからである。世間の学問ある人は絶対界の真理を相対的人間の智識を以て解せんとするから還つて誤謬に陥り易い。正直に一向に知識の教を信じて一心に念仏して如来の光明に自己の靈性が照らされて信心の眼開くる時は自然と仏智に相應して甚深の真理も自ら解せらるゝに至る。光りに照らさるゝ範圍は甚だ広い。大般若六百卷の如きも智慧光に照されたる真理の説明に過ぬ、此事は漸次に

説明せん。

二、慈悲と太陽の熱線。太陽は明かると共に熱い熱を放つて地上の万物を暖ため有ゆる生物を活して居る如來の慈悲は温暖なる靈力を以て衆生の心靈を温ため活かして居る。慈悲と云ふものは温暖なる心の作用である。世間には慈悲も同情もなき者を冷酷な人と云ふ慈悲心とは人の苦を我が苦とし人に楽を与ふるを己が楽みとなす。世に如來程一切の人類に対して最も慈悲の深い御方はない。我等一切衆生に無限の同情を以て苦を抜き楽を与へ給ふのが即ちミオヤの慈悲である。春和の温暖なる氣候を被れば百花爛漫と咲匂ふが如く如來の恩寵に触るれば衆生信心の花開きて麗しきを呈し芳ばしきを流す。如來の慈悲の存在することは一心に念仏して信心の花開きし人の心に証明せらる。理窟では分らぬ、全く光明に浴すれば法悦とて言葉には云はれぬ歡喜と妙樂とに充され神聖なる幸福を感じらるゝ様になる。之が如來の慈悲を太陽の熱線に例する所以である。

三、威神力と太陽の化学線。太陽には化学線なるものありて地上の凡ての物に化学作用を起して生物を育て居る。如來の威神力は人の意志の煩惱の悪質を靈化する能力を有て居る。喩へば渋柿の果も日光に照されて遂に甘干になる如く人間には貪欲驕恚愚痴嫉妬等の諸の煩惱の渋を有て居る是が為に自ら悩みまた人に憎惡せらる。其他種々の氣質または習慣等の悪質を以て人間の心と氣を固めて居る。之れが抑も人間の弱点である。然し此の悪質があるから如來の恩寵を仰ぐ必要も感ずるのである。凭る人間の苦味も渋味も如來の光明に遇ふ時は何時か心の渋味が脱けて最も賞すべき甘味と変はる。悪にも強きは善にも強く煩惱が菩提となりて人格も一変して聖き人となる。如來光明中にありて聖意を己が心とし清き正しき生活がなし得られる様になる。是又理窟でなく一心に念仏して光明に接する時は悪を廢して善に進み邪を捨て正に帰し人生を価値ある光榮ある人とはなし給ふ。

願はくば諸士よ、大ミオヤの光明は天地に充滿す。一心に念仏して靈光に接せよ。

初めて人生の真意義を覺ることを得ん。

## 光明生活

教祖釈尊が此世に御出ましなされた聖意は、一切衆生ミオヤの光りを識らず無明の闇に彷徨ふて、何れより生じ何れに帰趣すべきを知らず盲目的に生活して居るは実に憐愍の極みである。斯る衆生をして如来の實在を知らしめ秩序あり意義ある有終の美ある光明生活に導かん為めである。然るに世間五悪五痛五焼の朦冥の衆生を教化して五悪を捨て五痛を去り五焼を離れしめて正と善との光明生活に復活せしむるには実に容易のことでない。けれども世尊は懇ろに衆生に五悪五痛の人生の闇黒面を認めさせ飽まで永遠の光明に導き給ふことに奮闘努力されたのである。

精神生活に二類あり。一類の衆生はミオヤの光明に遇はず人生を闇黒の裡に葬り去るもの。実に凭る族は人間として罪惡のみでなく天心に逆ひ人道に戻る朦冥衝突にし

て難化なんげの類たぐひである。彼等かれらは肉欲にくよく我欲がよくの奴隸どれいとして精神せいしんが現在げんざいより永遠えいゑんの苦境くきやうに墮落だらくする族やからである。経きやうに「悪人あくにんは悪あくを行ぎやうじて苦くより苦くに入り冥くらきより冥くらきに入る」とは此類このるゑである。又また、一面めんけうそ教祖せうその教せしへもと  
りて聖意みづねを我わが意こころとし、意義いぎあり価値かちある生活せいかうわつをなし今日けふ一日いちにちの勤つとめは永遠えいゑんの基礎きそとなることを信しんじ永とこしへに希望きぼうの光ひかりは前途ぜんとに輝かやき現在げんざいを通つうじて永遠えいゑんの楽らく土どに安住あんぢゆうする者ものである。此等これらは失敗しつぱいの内うちにも成功せいこうの秘密ひみつを発見はっけんし苦境くきやうの究きはまりに楽らく土どを見出みいだし艱難かんなんに遇あはゞ己おのれを研みがくの砥石とishiと意得こころえこんく困苦たいに対しては人格じんかくを鍛練たんれんするの器うつはとなす。凭かくの如ごとき光明くわうみやうの前まへには一切さいの事業じげふとして悉ことごとく仏道ぶつだうならざるはない。経きやうに「善人ぜんにんは善ぜんを行ぎやうじて楽らくより楽らくに入り明あかるきより明あかるきに入る」とは斯かくる生活せいかうわつの類たぐひを云いふ。是これれ人生じんせいが永ながく光明くわうみやうと闇黒あんこくとの何いづれかに岐わかるゝ分岐ぶんきてん点てんである。

教祖けうそは凡すべての人間にんげんが染汚けがれと苦惱くるしみと無知むちと罪惡ざいあくとに覆おほはれて堅かたく業ごふに結むすび付つけられあ  
るを慥あはれみ斯かくる輩やからを救済きゆうさいせんには独ひとりミオヤの慈悲じひの光ひかりに温あためられて救すくはるゝ外ほかに

道なきを覺り給ひ、壽經に懇ろに斯る罪惡の凡夫をしてミオヤの光明に依つて心靈復活して光明の生活に入るは無上の光榮なることを御示しになつた。

無量壽經は教祖釈尊が大宗教育家とし宗教の真面目を顕示されし經典である。然れば此經を説かんとする会上に於て先づ釈尊自ら弥陀の光明に充滿されたる身心の相を現して光明生活の模範を示しなされた。暫く經の文を以て弥陀の光明に充される教祖の相状を明さん。爾時に世尊諸根悦予し姿色清淨にして光顏巍巍たり。時に弟子の阿難尊者が此の靈相を瞻て長跪合掌して御問申上た。今日世尊の諸根悦予し姿色清淨にして光顏巍巍たること明淨なる鏡の影が表裏に暢るが如し威容顯曜にして超越し給ふこと無量なり未だ曾て殊妙なること今の如くなるを觀上らざりき」と。

教祖が此經を説かんとして序文に此の相状を現はしなされたのは深き意義あり。其の所以は是より説示する教に依りて弥陀の光明を被むりて心靈復活する時は心が弥陀の慈悲に充され靈妙なる感応に依り身心全体が弥陀の靈德に充さるゝ故に眼根耳根よ

り乃至身の全体が弥陀の靈徳の容物となり法喜と禪悦に溢ち溢れて内部に充さるゝのが悦予の相と現はるゝのである。また弥陀の光明に反映したる徳が姿色清浄の相と現はる。弥陀の威神力が精神統一の力となつて引き締まつて来るから光顔巍巍と現れ威嚴が備はる。之が教祖世尊が我等衆生ミオヤの光明を被れば器の大小に係らず其の分相応に被りたる光明を以て生活々動の上に現すことが出来るとの人格的模範を示しなされたのである。

## 人生は修行に出されたのである

仏教に積極方面と消極方面とありて、消極面より見れば現世界現人生はかく人間になど生れ出さればよいものをそもく六道に迷ひ出したのが生死の苦を受けねばならぬ運命に陥ち入つたのである、故に是非此の迷から出でざれば眞の永恒の生命に入ることとはできぬと。

積極の方より云はゞ、法身の大明オヤより必然的に修行に出されたので天にも地に  
も此の五体五根六識にも本より罪はない。大明オヤの聖旨に随はざるのが罪である。

無論人の身心は完全ではない。されども報身の光明を被むりて靈化せらる可き性能を有つてゐる。即ち仏の子として光明生活に入らるべき可能性を有つてゐる。

人類は高等生物の故に宗教の要あり能あり。動物でも劣等なる石は琢磨の要はない人類已下の動物は宗教を以て脱却すべき要はない。人類は金剛石の如くに琢磨せざればならぬ性を有つてゐる。是非とも報身の光明を被むりて靈化せねばならぬ。それが即ち法身の大明オヤより産み出されたる仏性の卵を報身の慈悲と智慧の光明によりて靈化せらるべき性を有つてゐる。折角に人間と云ふ学校に選み入らされて十二光の光明に依つて信心開發の生活に入つて大明オヤの子として此の学校を及第せねばならぬ。

現在の生活は日々の二三万の米が生命を献げて我等に食と成つてくれるので此の人

間の肉と血となつて大ミオヤの光明生活に入るべき身に成らん爲めに米は犠牲と成つてゐる。若し日々二三万の米の生命を己が血肉と爲して居つて日々に餓鬼の精神生活を爲せば食はれたる米まで餓鬼道に墮ちてしまふ。我が責任は重い。此重い責任はとても自分の力では担はれぬ。無限の力ある大ミオヤの光明を仰ぐ外はない。進めよ〜大ミオヤの光明を被むりて。働けよ働けよ聖旨のまに〜。

## 如来の光明と日光

如来の光明は何なる相と能とを有てをるかとなれば、此私共の身体は太陽の光明に活されてをる若し太陽の光なかりせば此身体は活きること出来ぬ。

私共の心霊は如来の光明を受けて靈的に活きことを得る。如来の光明に對する觀念は太陽の光にて万物活ける如く如来の光明に依て清き信仰心が活る。即ち永遠の靈的生命は如来の光明に依て活ることである。一切の生物が太陽の光明に依つて動物的

に活かされてをる如く、如来の光明は人を聖靈的に活かす能力を有つてをる。

## 太陽と如来光

如来の光明は超日月光と申して太陽の光よりは高等である。世には太陽に超えたる光明何れに在るかを問ふ人がある。けれども如来の光明は肉眼に認むることができぬが其光明を被りたる人は精神的に靈的に活きて、只だ太陽の光にて動物的に活きてゐる計りでない。如来の光明が太陽の光明に超えて高等であることは何に依て証明せらるゝとなれば、日光と如来の光とは物質的肉眼を以て比較することは出来ぬ、けれども其光明を被りて養成せられたる人の精神に於て証明せらる。日光は人の動物形的の形骸を活すけれども人の精神を靈化して高等なる信仰の生活に入れて清き人として活かすことはできぬ。古今に亘り靈的偉人の最も円満なる人格は如来の光明に依て靈化せられたる結果に外ならず。

## 光明は見えねども触るゝ

春の氣候は天より来るは見えねども春来れば暖温なる和氣が徐ろに到り新緑萌発しまた蕾の芽生して花開くが如く、如来の光明は眼には見えねども只だ如来は実在すことを信じて一心に念仏して至心不断なれば漸々に光明に触るゝことをう。然る時は自然に自己心中に発現し来る靈的氣分は春の氣候に萌発する芽生の如くに、一種云ふべからざる靈的氣分有り難いと云はんか歡喜と云はんか、この喚起し来る心を信心喚起と云ふ。故に經に其衆生ありて斯光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔軟に歡喜踴躍して善心生ずとは、斯如来の光明に触るゝときは人の心が一転して靈性の生れ来る心理状態を説き給ひしに外ならず。

古人が、秋来ぬと眼にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる、と詠しごとく如来の光明とて眼には見えぬ、然れども唯如来の大悲を憶念して一心に念仏して心々

相續至心不斷なる時は、天地に漲ぎる如來の靈的光明に自己の奥底に伏する心靈に一種の靈的氣分が響きて、秋風に寂寥を感じる如くに、実感し來るのである。

## 清 淨 光

念仏の一行と十二光。行は一心に弥陀一仏を念じ自己の一心統一してまた能念所念として自分の心が弥陀を念じて弥陀の外に我心なく我念が即ち弥陀にて弥陀が即ち我心となるやうに、一心一行漸々深く進むに随つて我心と弥陀と離すことのできぬ心の状態である。喩へば炭に火が燃つりし時炭全体が火となり火即ち炭を燃す如くに我心の闇、煩惱の炭も弥陀の光明を念じて念々弥陀に相應する時は煩惱の炭も如來光明の心と化す。これを念仏心と云ふ。然れば即ち一心念仏一行なれども一行の念仏によつて心が弥陀の光明化する時は心の体は本一なれども光明に化したる心の相は種々の方面に觀ぜらる。人の心は本一体なれども四類に分類することができ。感覺と感情

と知力と意志とである。感覺とは眼で視、耳に聴き、鼻に嗅ぎ、舌に味ひ、身に触れて起る処の心の相にて之を仏教にて眼に色を見わけるを眼識界といひ耳に声を聴覚するを耳識界といひ鼻にて嗅覚するを鼻識界と名づく。すべて此れを五根と云ふ。一、体凡夫の心は此五根の爲めに、眼にて嬋妍たる峨眉紅顔を視れば忽ちに執着の念が生じ、即ち眼の慾耳の慾口腹の慾杯の爲めに惹かれて、此色と声と香と味と触との五境に對して六根が常に染さるゝ故に六境を六塵と云ふは人の五根を通じて心を染汚する故に六塵と云ふ。日々の見聞覚知から心を汚すことは常に断えぬ。

例へば人の身体は活てをる限りは、肉の分泌物が毛孔から分泌するのと亦外から塵埃が附着するのとで垢穢が常に身につく故に、清き水または温湯を以て垢を洗濯するの要あり。

また衣服にても敢て能く垢を附着せざるとも自づと着物に垢がつく。故に洗濯して之の垢穢を除きて清潔になれば氣持よくなる。外の垢は感じ易きが故に之を洗濯の必

要えうを感かんずるけれど心こころが常つねに六塵ちんから染汚けがさるゝ垢あかは中々なか／＼に強つよくして、また畜たひに身体しんたいや衣服いふくの垢あかよりは人間にんげんの最もつとも貴重きちやうなる人格じんかくの上うへに及およぼすことなれば実じつには最もつとも心こころの垢あかを淨きよめて六根こんしやうく清淨じやうじやうにして人格じんかくの光輝くわうきを發はつすべきなれども、そこが凡夫ほんぶの淺あさましきである。顔面がんめんや外皮膚くわいひくの垢あかつづのが他見たけんを憚はまかることは感かんじ易やすきなれども己おのが心こころの垢あかが自己じこの本人ほんにんに對たいして慚愧ざんきの感かんが少すくなきは是こゝろれ人の心こころの淺間あさましき敷しゆ多おほなり。こゝが凡夫ほんぶと聖人せいじんとの異ことなれる所ところなり。

常恒じやうかうに眼前がんぜんに在まします如來にやらいは我等われらが肉體にくたいの面かほを見給みたまはず我われらが心こころを照てらし給たまふ故ゆゑに我等われらは如來にやらいの御前おんまへに慚はぢまた己おのが心靈しんれいを愧はづ。あゝ実じつに我われらは淺間あさましき凡夫ほんぶである、自ら人格じんかくを高等かうとうに進すすませんとはせで自ら肉欲にくよくの奴隸どれいとなり六根こんより六塵ちんの為汚ためけがされて夫それに愛溺あいできして自ら清淨みやうじやう高潔かうけつの心こころをたもつこと能あたはざるは実じつに野卑やひである。

されば遺經ゆゐきやうに當まさに五根こんを制せいして放逸ほういつにして五欲よくに入いらしむること勿なかれと。五根こんとは眼げん耳鼻舌びぜつしん身しんにて五欲よくとは眼めに色いろを視み、耳みみに音おとを聞きき、鼻はなは香かを嗅かぎ、舌したは味あぢをしり、

身は物に触る。此の眼や耳より肉の快樂を貪ぼるを五欲と名づく平生に慎みて能く五根を守りて能く制裁せよ譬へば牧牛者が杖を執つて之を視して縦まゝに人の苗稼を犯さしめぬやうにせよ、若し此眼の欲耳の欲を縦にせば唯五欲の將さに涯畔なうして制す可からざるのみでない（五中一例を挙げれば口の欲酒飲の如きは是酒が初めは少量にても酔ふて愉快に感ずるも刺激に抵抗する性が有る故に漸々に発達して終には多量に飲まざれば酔はず段々に昂進して屢々飲酒する時は習慣性と為りて必需とて無くてはならぬやうに為りまた病的となる而するときは酒の気がなければ体も持たぬやうに為る其の害は身体の機能を毀損して病氣となりまた其の毒を遺伝して子孫の體質を病的にするが如き）遂ひには如来より稟けし自己の靈性を滅亡ぼして再び靈に活き更へるてふ時期を失ふて仕舞ふのはまことになげかはしき次第である。

如来の清淨光は人の五欲の為めに汚さるゝを救済する大なる力を有つて居る。

凡夫の習ひとして五欲の為めに自己の人格が墮落しまた衛生等にも甚だ害あること

を知り乍ら自らの力で之を改正することが出来ぬ。また概くは自暴自棄に為つて逆も自分で人格の改造ができぬ。夫は自己の靈性が永遠の生命を信知せぬ故に自分を唯此動物的生活の方面から計り認めて居るのである。

自己は尊き靈性を有てをる。清淨光に依て清められて日々に六塵に汚さるゝ六根を清淨にして自分の此眼に來たり与へられたる清き眼である。眼の欲の爲めに惑はされていかに翠黛の蛾眉の爲めに惑はされて人格墮落してしまふ如きは汚らはしいことである。

清き光よ我らが眼を淨めてあなたの眼の如くに清くして給へ。

## 清淨皎潔にして満月の如き人格たれ

人は此人品即ち此形骸の上にはいかに立派なる、即ち在原業平、平井権八などと形骸の上から世に称せられたるも其の品性に於て皎潔にして球の如くに光彩を放つべき

人格にあらざれば何んぞ云ふに足らん。実に現代の青壯年の志気は明治の物質の文明進歩が唯物質の方面にのみあせりて、品性の内的改造するに違ない程であつたために内部の道德的人格を造る方は外部の進歩發達には比較にならぬほど劣つてをる。

## 人格改造の清淨光

如來の光明獲得の目的は自己の人格を改造する処にあり。人類は他の動物と異にして必ずミオヤの光明によりて自己を覚醒してあるべきやうに自己を指導し改造して光明の中に生活すべきものである。否な光明の中に入るが故に人格が一転するのである。

他の動物は本能的に眼の欲耳の欲また色食の欲でも本能的で、換へて云はゞ天から与へられた丈を正直に守りて食物でも飢うれば食うて飽けば止めて敢て人間のやうに貪らぬ。また生殖の本能にても春期が至ればたとひ狂ひ争つて色欲を逞うせんとする

も其期過ぐれば其欲も止む。人間は天の特寵を得るとも云はんか自由を得るが如きまた智慧も進み意志も自由にてすべて心の作用が発達してをる丈けに自から能くあるべきやうを覺りて色食の欲にしても清淨に自ら分を守り節を保ちて清淨にせざれば天賦の體質を傷ひ動もすれば生命をも促むるに至る。

自己の身体及び五根及び一切の生理機能は即ち口腹の欲を恣にするために胃腸を傷ひ消化器を害するやうなことをせぬやうに自ら能く覺りて清淨にせよ。一切の食物は生命を養ひ自己に賦与せられたる天職を全うする為めに与へられたる身体及び一切の機能を完全にして而して此世に出たる天分に叶ふやう力の有限り努力して清淨自活してミオヤに報ひ奉るべき使命に用ふる身を唯美味を貪り酒に耽りて飽くことをしらず、闇黒の中に沈淪して不淨不潔の身となり病を求め命を縮む如きは実にミオヤに對する仇といふ外なし。人類には夫が為めに理性と云ふ智慧を以て生理上の智も道德上の智も能く明らかに識らるゝやうに智力作用を賦与せられざるにも拘らず唯其のミ

オヤの使命を果すべく人格を高尙に殊勝に進ません爲めに与へられたる智慧を還つて悪用して唯智慧を以て動物欲の本能を逞うせんとするが如きはミオヤの聖意に叶ふ筈がない。

清白皎潔にして生活せよ、是れ清浄光裡の生活である。

## 人は改造すべき精神的生物

犬馬の如き動物は本能的にして自己の本能のまゝに発達してゆけば犬は犬の本能の働き馬は馬の本能あり。人間も動物であるから一方より見れば動物的本能の性を有てをる事に異らざれども、人類は食物にしても料理をして食ふごとく之れを消化する機能に於ても人間的に習慣性を爲してをる故他の動物と同じからず。人間は生れたままの本能計りでなく終には理性の如く学修によりて修業の結果として高等なる知識の働きを爲す。他の動物には理性が発達して居らぬ故に人間の如くに学業を以て知識を

磨く必要がない。人類は動物と異にして、学業を以て修練せねばならぬ理性を以てを  
る。

例へば鉱物の類にても素朴なる石の如きは天然に自分に有てる朴質のまゝにて還つて風致の見るべきあり。朴石を琢磨するも光を放つべき性なきのみならず還つて天然の風致を破壊して了ふ。然るに高等なる寶石や珠玉に至つては充分に琢磨して始めて其の有せる最も貴重なる性質を発揮して光輝燦爛として光を放つ如く、人類の頭脳に潜伏せる寶石は之を琢磨して実に尊重なる本性の光が発揮す。人は唯教育を以て理性の知識を研くべき斗りにあらずして其の奥底に有せる靈性は人類の頭上の王室にして之を開発し其の靈性の光を発揮して始めて人に万物の靈長の徳性が顕はるゝなり。

天より賦せられたる人の頭上の玉座に嚴臨すべき靈性は是を仏教にて仏性と名づく人は仏性を開きて、この光を以て自己の動物性を自から制裁し指導して光明の大道を如実に行為すべきである。

## 念仏とは仏と離れぬこと

念仏は大乗仏教の宗教的意識の最大事である。一切万行は是より出る。一切諸仏は此念仏に依て成仏せりと經に示されてある。念仏とは念ずる人と如来と共にして離れぬ意義である。念と云文字は人と二と心にて即ち二人離れぬ心を云ふ。世に念頭に繫ると云は、自分の外に他に或物に対して其胸臆に往来して離れぬことである。例へば孝行の子が常に其父母を憶ふて念頭に捨てざる如く、人は本心に愛する人をば忘れんとしても忘れられぬ。詩經に衷心之を嘉みせば何の日か之を忘れんと云やうな工合に終始其念頭に在て離れぬを念と云ふ。今念仏とは自己の心裡に今世後世を通じて生命を獻げて信愛する 弥陀尊を常に念頭に戴きて、離れぬを念仏と云ふ。即ち仏念ひの心である。絶対的に尊きすべてに超て信愛する如来を、常に頭に戴きてをることである。觀世音菩薩が御頭にいつも弥陀尊を戴いて在すのは、其意味を表徴したのであ

故に觀世音はすべての念仏者の先達にて念仏する人は誰人もかやうに為れとの模範を示しなされたのである。觀音菩薩の頭（精神）には弥陀如来が威神光明赫々として、照鑑し給ふことを信じなされてをる。其胸の裡は常に弥陀の慈悲に充たされてをる。何人も弥陀の慈悲に満たさるゝ時は大小はあれ觀音と為るのである。觀音の念頭に永しへに弥陀如来が離れぬ。弥陀の光明に靈化せられた人格が即ち觀世音である今の念仏者は生れた許りの觀音である。念仏者の心頭には最も尊とき弥陀尊が常に真正面に在ますことを念ふ時は、縱令肉眼にて人の面貌を見る如くに視えぬからとて、心眼の前に威神光明の如来が實在するを念ずる時は、肉の形に見ゆる人よりは優に尊とく有難く想はるゝ。本より眞の如来は肉眼にて瞻めるものでない。觀經に如来は是れ法身界にて一切衆生心想の中に入り給ふと。夫を聖曼鸞は法界身とは肉眼にて見べきものでなく意識の對象にて即ち心眼にて觀るべき尊体であると釈された。

如来は本来大靈体にして実に一切の処に何れの処にも在まさざる処はない。但し人

の信心しんじんの鑑かぎみが明あきらかならざる為ために影現えうげんせぬ。如来にょらいは靈体れいたいにて色心不二しきしんふじである。一方ほうより見れば、大智慧だいぢゑの光明くわうみやうとして偏あまねく照てり渡わたれり。また一面めんよりは何なんとも云いはれぬ麗うるはしき妙色めうしき相好身さうごうしんと現あらはれたまふ。故ゆゑに衆生しゆじやうの一心しんに念ねん仏ぶつして信心しんぐの鏡かどみだに明あきらかになれば、或あるは麗うるはしき相好身さうごうしんと現あらはれ、或あるは大慈悲だいじひとして有ありがたく感かんぜらる。經きやうに衆生しゆじやう信水澄しんすずむ時は仏日ぶつじちの影映かげうつると。如来にょらいは常つねに念ねんずる人ひとの眞正まっしょう面めんに在まじります。但ただ自己じごの心水しんすずが濁にごりてをる故ゆゑに分明ぶんみやうに現あらはれぬ、信心しんぐの水みづさへ澄淨きよくすむ時は必かならず明あきらかに映うつり来る。然しからばいかにせば信心しんじんの水みづが澄すむやうに為なることになる哉かとの問題もんだいが起おこる。开そは佗たなし、唯一心たぎしんに念ねん仏ぶつして心々しんく相統さうとくし、念々ねんくに仏ほとけを念ねんじて不断ふだんなる時ときは、必かならず信心しんじんの水澄みづみて如来にょらいは我心わがしん水すゐに宿やどり給たまふに至いたる。經きやうに如来にょらい光明くわうみやう威神功徳いじんくどくを聞きいて至心ししん不断ふだんなれば心こゝろの所願しよらんに随したがひて光明くわうみやうの中に生しやうずと云いふも其意そのい義ぎに於おいては同一どういである。読者よみ諸君しよくんよ諸君しよくんの日常にちじやうの胸臆むねのうぢに多く往來わうらいしてをる物ものは何物なにものであらう。どう云いふ事ことが常つねに念頭ねんとうに繫かつて居をります。あなたあなたの心こゝろを誘いざなふて高たかく清きよく仰あはくも畏かしこき計ばかりに向上かうじやうさせるやう

な事は有ますか。若し念頭に弥陀を離れたならば貪瞋五欲の想のみでは有りませぬか。經に一人一日の中に八億四千の念ありて、念々の所作皆な是れ三途の業と説給ふてある。そこで未だ信心の光明を得ぬ間は日々に闇の裡に三途の業を造りつゝあるも夫が分らぬのである。いかゞでせう諸君、元來人間の生れたまゝの心は本劣等な本能的な動物性なのである。之に加ふるに五塵六欲の塵埃に惹れた心は実に淨いものでない毎日胸の中に往來する念は貪欲の餓鬼瞋恚の地獄愚痴の畜生の心を以て塞がれてゐるでは有りませぬか。宗教上より云はゞ人間の最も貴重なものは自分の心念の向け方と働き方のいかゞであります。地獄を造るも仏を造るも、日常の心頭の働きを本と為るのであります。そこで衆生は本來心の奥底に仏性を具有してをるけれども開は未だ鶏卵の如な物なのである。爰に於て此仏性の卵をあたまめて仏子と為るのに唯一の法は念仏ばかりである。念仏とは仏を念ふ心なのである。我等が口にナムアマミダブと御名を呼ぶ時に、心の真正面に最と尊とき弥陀尊が威神の光明赫々と照らし慈悲の尊容

我を見そなはし給ふと想ふ時は、いかに我らが浅間しき心も、自づと正しくせざるを得ぬ。実に我らは弱き者、自分の心のみでは闇の中に罪を造る外はなき者である。唯神聖なる如来を念ずる時にのみ初めて仏心我に來りて我心と為り給ふ。如来は念仏者に對して増上縁と申して非常な大なる力を以て助け給ふ。例へば我らは或縁に觸れて勃然として忿を起す時にフツト氣づきて仏を念ずる時、尊とき如来は大悲の笑顔を以て我面前に在ますと念はるゝ時は、いかに我らが忿怒も自から和らがるを得ぬ。また我等が事に依りて悲しみに耐えぬ寥しさにたまらぬ折も口に御名を稱へて大悲のミオヤを想ひ奉るとき何とも云はれぬ有がたさと歎びとが胸の中より湧出し無限の慰安を与へられる、実に何なる事にも増上縁と云ふ強き力を以て助けて下さる。我らは弱き凡夫である。必らず大悲のミオヤを離れてはならぬ。其大悲のミオヤが我らが念頭に往來して我を助け給ふ其心の表現が即ち稱名の声である。其稱名の声を発する心の奥には大悲のミオヤが在ます。是を念仏とは仏と自己と二人にて自己心中にい

と尊たふとき一りのミオヤが在ますことを申まうすのである。

## 火と炭との喩

時は嚴げん冬の寒さの極きみなる頃に、座敷の隅すみの火鉢ひばちの中に火ひがカン／＼と燃もてをる。而そすると誰たれ人も寒ささに耐たえぬから遠慮えんりよなしに両手りやうてを其上そのうへにかざしてをると、自おのづから全身ぜんしんが暖あたかになる様やうな氣持きもちがする。あの火鉢ひばちの中に真紅まつかな熱あつい火ひがいかゞでせう、未まだ火鉢ひばちの中なかに入はいらぬ前まへ炭箱すみばこの中なかに真黒まつくろな而そして冷つめたい炭すみで在ありし折せりは、何人なんびとも顧かりみる者ものもなかつた。若もし之これに手てを触ふれば意地悪いぢわるに手てに黒くろく染しみつく、されば、誰人たれにも嫌きらはれる性質せいしつを持もつて居をつた。然しかるに其それが一たん旦ひばち火鉢なかの中なかに入りて火ひと結婚けつこんして相互さうごに抱擁ほうようして同体どうたい一心しんとも為なつた後のちには不思議ふしぎでは有ありませぬか、性格せいかくが丸まるで一べん変へんして忽たちまちにアノ真黒まつくろな面かほは變へんじて春はるの弥生やよひの桃ももの花はなよりもつと紅くれないの色いろと為なり、元もとは愛嬌あいけうのない冷つめたい炭すみが今度こんどは非常ひじやうな燃もえつく様やうな愛嬌あいけう者ものと為なりて、而そしていかに高位かうゐな方かたにもまた卑ひ

賤せんな者ものにも分わけ隔へだてなく同おなじやうに暖あためてやる。されば何なん人びとも其その温あたたかなる愛あい嬌けうと同どう情じやうとは引ひつけられて、手てをかざしてをるとさうすると不ふ思し議ぎな事ことには今いままでは蒼あを白しろな顔かほをして指ゆび先さきのかじけて居をつた人ひとも忽たちちに元げん氣きが復ふく活くわつして顔かほは紅くれない、指ゆびは自由じゆうの働はたらきを作なすやうに為なる。また元もとは炭すみには冷れい水すいを沸わかす力ちからは無なかつた物ものが今いまは冷れい水すいをも忽たちちに沸にえ湯ゆと化くわし飯めしをも有ある料れう理りをも勇いましく煮にあげる能のう力りよくを持もつやうになる。さればこそすべての人ひとに歓くわん迎げいせらるゝ物ものとなる。諸みな君さんよ私わたし共どもの胸むねの全ぜん部ぶを占しめてをる煩ぼん惱のうは炭すみである。直ちに腹はらを立てるネヂクレル、ヒガム取とり越こ苦く勞らうをするまた貪むぼる実じつに有ある弱じやく点てんを持もつ居をり而しかして我われが／＼とガン張ばりてをる。自じ分ぶんが意い地ちの悪わるい癖くせに若もしも佗た人にんが自じ分ぶんに對たいして誉ほめもせぬとかまた親しん切せつにせぬと直ちに不ふ足そくに想おもひ、自じ分ぶんは他た人にんに對たいして毫ごうも親しん切せつや同どう情じやうの暖あたかみのない冷つめたい私わたし共どもの心こころの炭すみである。若もしも手てを触ふれば直ちに黒くろく染しみつく如ごとくに私わたし共どもは他た人にんの悪わるい事ことを人ひとに聞きかせ悪あく影えい響きやうを佗た人にんに染しみつけやうと為する気き分ぶんを持もつてをる。実じつは私わたし共どもの心こころは煩ぼん惱のうの自じ分ぶん勝かつた仕し方かたのない奴やつで在あつた。然しかるに

私共の煩惱の炭に、弥陀大悲の火が燃つく時は忽ちに心が一変して心の色が紅蓮華の如くなる。されば經に念仏する者は人中の妙好人最も美しき蓮華と誉たまふ。念仏して弥陀の大悲が我らの胸中に燃つく時は有がたさと歡喜とがカン／＼と燃あがり実に歡喜踊躍の狀態と為りて燃ゆる心念の能力である。經に斯光に遇ふ者は三垢消滅し歡喜踊躍を得るは是である。また炭の働きのて煮焼の働らきを為す如くに如来の恩寵に充され感謝の念に動かされて日々の所作も勇ましく働らけるやうになる。火より蒸氣を發して非常な力を為す如くに、弥陀の恩寵の火が我らが心念に燃つゝある時は人格が一変する。身も心もすべての形氣の悪質が靈化して如来の聖意を自己の意と爲し慈悲に同化し親切な心を以て他人に待し得らるゝやうに爲る。然して見れば我等が煩惱の炭が有ればこそ如来の御慈悲が燃つきて、如来の恩寵を現はす器械と爲るものとすれば、我等が煩惱とて決して捨べきものでなく唯慈悲の光を得て慈光の燃ゆる心念と爲ればよいと信じます。

## 如何にせば慈悲の火が燃つくぞ

我等が煩惱の炭に慈悲の火が燃つきさへすれば、忽ちに心が一変して、昔に換りて悪にも強きは善にも強きとの諺の如くに人格は一変するとのことは今は疑はじ。然らばいかせばに我らが煩惱の心に慈悲の火が燃つくべきぞとの問に對しては、こゝが諸君に御勧め申す肝心な事である。若し火鉢の炭に火を熾んに燃つかせんとする時は団扇とか火吹筒を以て酸素の風を輸りつける。而すると初めは微少の火が漸々に燃えつきて熾んに為りゆく如くに、念仏とは如来の慈悲の火が我等煩惱の心に燃つくのである。如来の慈光の燃つくのは我等が心である。夫に口に称名を唱ふるのは何の爲であるとなれば恰も火吹筒で煽り立て、酸素の風を輸り込むやうなものである。但し煽り立てるのも炭に火の燃つかせる如くに仏念ひの心を発す爲である。弥陀の慈悲の光が我等の心に燃つく処に念仏の真意が存す。例へば幼稚な子供が親より命ぜられて

汝なんぢ此この火鉢の炭すみを火吹筒ひふきだけにて吹ふけよと云いふので頑くわん是ぜない子供こどもは火ひを燃もえつかせる為ためとは  
しらぬ。唯ただ吹ふけばよいと思おもふて火ひの消きえ失うせてをる炭すみを吹ふ立てをる如ごとくに、念ねん仏ぶつさへ  
申まうせばよいと思おもふて口くちに称しょう名みやうを唱となへて居ゐても心こころには弥み陀だの慈じ悲ひを離はなれて居ゐては無む意味い  
である。念ねん仏ぶつは仏ほとけ念ねんひの心こころにて常つねに心こころ仏ぼつを念ねんじて離はなれぬことである。されば何なん人びとも  
決けつして救すくひを受うえられぬ者ものはない。世よに私わたくし共どもの如ごとき煩ぼん悩のうの強つよき者ものは念ねん仏ぶつしても駄だ目めで  
ある救すくひを受う得えられぬと自じ暴ぼう自じ棄きし給たまふこと勿なれ。真ま黒くろな煩ぼん悩のうの炭すみなればこそ慈じ悲ひの  
火ひが燃もつのである。灰はいの如ごときは白しろく淨きよいからとて灰はいには火ひが燃もつかぬ。私わたくし共ども  
の煩ぼん悩のうの炭すみは本もとより弥み陀だの慈じ悲ひの火ひを燃もやす為ためのものと思おもへば還かへつて頼たの母も敷しく感かんぜらる  
ゝでありませう。念ねんの字じが二ふた人たりの心こころとは炭すみが独ひとりではなく火ひと一た体たいと為なりてこそ斯これは  
おほおほきな働はたらきを為なす。我われらが心こころは一ひと人でなく弥み陀だの慈じ悲ひと一つに為なりてこそ非ひ常じやうな力ちからを  
も得え、而そして勇いましく有ありがたた難がたさと歎よろこびとの燃もえたつやうな信しん仰かう心しんと為なる。日ひ々び熾さかんに燃もや  
す石せき炭たんの火くわ力りよくなる念ねん仏ぶつにて日ひ々びに真しん善ぜん美びの淨じやう土どに向むかつて進しん行かうする。凭かく如ごときの人じん生せいの

行路は楽しくして且つ前途の光益明かである。

## 帰命と念仏

帰命と念仏と云ふことに就て宗教の真理を説き示さん。南無の梵語を帰命と訳す。帰命の解釈に二義あり。帰本と帰依の中に帰依の義に就て帰命の義を明さん。帰依とは、衆生は心が無智無力なれば絶対大なる大威神者大慈愛者に帰依（トツグ）の義である。帰とは世の女子が夫にトツグと云ふ義。詩經に「桃の天々たる此葉蓂々此女こゝに帰ぐ其家宝に宜しく。」一体女子は独りで家庭を成し子孫を成すことはできぬ。必ず男子にトツガねばならぬ。夫に帰きて初めて家庭を造り子女を挙げて家室をグハイ能く為すものである。故に男子に嫁すことを（トツグ）と云ふ。即ち（トツツク）と云ふ義である。然して女子が男子に帰ぐに就ては最良の配偶者を選ばねばならぬ。若しも生涯の運命を一任する夫にして或は放蕩者或は無頼漢の如くならば又奸邪悪性漢に帰

ぐときはいかに悲運ひうんの酸苦くろしみをなめなければならぬ。世よには奸邪かんじや色魔しきまの毒手どくしゆにかゝりて悪魔あくまに身を委ねゆだ竟つひには身を醜業しゆうげふ婦ふうに酷うられまたは破鏡はきやうの悲運ひうんを招まねくにいたる如ごときは概がいして女子ぢよしの智慧ちゐゐなく一時じの迷まよひの為ために竟つひに生涯しやうがいを誤あやまるに至いたるは即すなはち帰とつぎ所どころを誤あやまりたるの致いたす所ところである。是これは一生しやう六十年ねんの損失そんしつなり。まして況いはんや永遠えんゑんの生命せいめいを一任にんする心靈しんれいの帰とつぐべき宗教しゆうけう上の帰命きみやう信賴しんらいすべき信仰しんかうの对象たいしやうたる本尊ほんぞん（神かみ）を撰定せんていするに於おいては最も大事だいじなり。

今いま仏教ぶつけうには一面めんは一神教しんけう、佗面ためんは汎神教はんしんけうなれば、一神教しんけうの真宗しんしゆうの如ごときは弥陀みだ一仏ぶつの故ゆゑに真しんの本師ほんし本仏ほんぶつはなきと云いふ宗風しゆうふうなれば本尊ほんぞんを撰定せんていするの要えうなし。また汎神はんしん的しきの禅ぜん天台等てんたいとうの如ごときは自己じ是これは仏ほとけなれば他た仏ぶつを本尊ほんぞんとするの要えうはない。我國わがくにの如ごときは宗教しゆうけうの教けう不完全ふくわんぜんなるが故ゆゑに迷信めいしん多く邪教じやうけう淫祠いんし甚おほし。又種々またしゆくくざつた雑多ざつたの神かみを拜はいし何いづれの神かみが最高さいかう等とうなるまた真理しんりなるかを覚さとらず実じつに愚人ぐじんの浅間あさま敷現しきげん世祈ぜいのりの信仰しんかう、いかなる淫祠いんし邪教じやうけうでも選えらばざるに至いたる。それらの邪神じやしん魔鬼まきは衆生しゆじやうの心靈しんれいを完全くわんぜんに円満えんまんに成就じやうじゆうせしむべき

の神にあらざ。然るに浅劣なる愚夫野人の信心の帰する処恰も愚なる女が色魔の爲に魅せられて生涯を誤るよりも甚し。是宗教が信仰の対象たる帰ぐべき本尊を選ばなくてはならぬ所以である。然るに大乘仏教に教ふる所の信仰の本尊は最も勝れ最も完全なるもので、宇宙の真理はもと一なれば真理の主なる神格は唯一ならざるべからず。この唯一の本尊を教祖は教へ給へり。仏教に十方三世の無量の諸仏を説き給へども、其中心本尊は無量寿如来なりと。經に「無量寿仏の威神光明最尊第一にして諸仏の光明及ぶこと能はざるところなり」と。而してまた弥陀は諸仏統攝の独尊たるのみにあらず。無量の行願を以て一切衆生の爲に衆生の靈性を成就せしむべき誓願あり。聖善導は、この誓願は衆生の爲なりと。故に衆生信仰の帰命信賴すべき尊を求めむと欲せば独り阿弥陀仏に帰せよ。即ち弥陀に帰げよ。弥陀のみ独り無上の愛を以て衆生を摂受して衆生を我有として、我（衆生）を成就せしめ給ふ。

例せば女が夫に嫁ぎ既に結婚するに及びては、独身の當時とは異れり。また男も然

り。独身の折には縦令いかなる事を為すも災を妻に及ぼす憂なきも既に結婚の後は若しも我身を過つた事を為さば禍を妻に迄及ぼすとの懸念あるが如くすべての事に心の妻にかゝる故に女を称してつまと云ふ。即ち心の妻にかゝりあるの謂なり。妻もまた処女の時代とかはり夫は常に離すことのできぬ心の結べる配者なり。国語に背子また背と云ふ常に夫が背にあるの謂なり。彼の衣通姫の「我が背子が来べき宵なりさゝがにのくもの振舞こよひしるしも」と。我が夫君を背子と云ふの心にて結婚して後は心の妻に在ること背にある如く独身の夫とは異りて義に於て二人同身の理である。心靈に於てもまた既に帰命の神格は唯一でなくてはならぬ。之を帰依仏という仏に歸きて爾後は余の外道の神に歸せぬなり。是を儀式的に表せば、正しく心靈の帰結、即ち結婚式を帰敬式と云ふ。縦令儀式を以て帰敬の意を表せざるも正しく自己の信仰が唯一の神尊に歸して云何なる事情の下にも帰依信頼の心意が動かざるに至りまた他の宗教のために帰命の神尊を變更せざるに至れば正しく帰命の実を成したるなり。然る時は即ち

心靈的に結婚したるなり。爾後は心の妻に如来は常に在ますなり。されば従来の無頼  
独身の夫とは同じからず。神聖なる如来は心の奥宮に光明赫々と輝けり。大慈悲の  
弥陀は慈悲の面を注ぎて永へに向ひ給へり。赫々たる威神の前には自から正肅ならざ  
るを得ぬ。愛々たる慈愛の温容を想へば心の悩もまたは怒も和らぎて平和と歓喜とに  
満されん。凭く如来が常に心の妻にかゝる時は、自己の精神生活も理想も高尚になり  
向上の光明をも得るに至らむ。此れ聖靈なる如来との結婚、是彼が齎らし来る持参  
財産なり。我れ彼に帰ぐが故に彼は我と離れざるなり。我はあなたの有なり。我は全  
く全幅を彼に献げて而して彼が我を容るゝことを悦ぶなり。我全部が彼の所有と為る  
時は彼は我有であるなり。然れば彼は常に心の妻にかゝりて捨てることができぬ。  
聖法然が「我はたゞ仏にいつかあふひ草心の妻にかけぬ日ぞなき」と。是道詠の意こ  
そ聖法然が如来の靈と結婚したる上の心理状態なり。

# 念 仏

念仏の念てふ文字は、人二心即ち二人相拱したる心なり。念は念頭にかゝる、何か自分の外に或物が常に心にかゝること。例へば金に執心する人には常に念頭に金と云ふものが執して離れぬ。また一人の子に愛執する人の念頭には常に子を念ふてをる。然る時は自分の心の中に子と二人を為してをる。人物若しくは財物とか何物か心に懸る物無き時は念頭になきなり。念頭に阿弥陀仏が在まして離れぬ様に為りしは即ち念仏仏おもひの心である。従来の明記して忘れざるを念と為すと云ふは唯記憶の心理状態の如くにして、感情的、執意的になつて居らぬ。故に仏を念ふ心理としては未だ完からず。宗教心は唯仏を記憶に存するのみならば未だ活た信仰と云ふに足らず。弥陀の絶対的人格に対して愛慕恋念して感情的に内心に活躍して暖温なる活気に血湧き、有難さに涙こぼれすべてに超て弥陀を愛樂して止まず、悲歎に沈む折柄も弥陀を念ず

る時は心の奥底より衝動する有難さに心気一転、忿怒に耐へざる場合にも称名によりて念ひ出づる慈悲の面影に接する時は却て己が到らざるを謝するに至る。念仏とは常に如来を憶念して離れざるの謂、一度絶対の人格者に結びて念ふ心に離れず憶念し愛慕して捨つること能はざるは念仏なり。二人の結びたる心が即ち念である。能念の心に所念の弥陀と一体心に結合したるの心が念なり。

## 念仏に安心と起行

安心とは安置心、即ち心の安置すること。自己の宗教の主とする処の己が帰ぐ処の神尊は唯一無二独りの神に帰きて二つとならべておかぬこと。例へば、貞女両夫に見えずてふ如く独の神尊の外に併べて帰ぐべき神なきなり。独一の神に心を安置していかなる事情の下にも其帰命の心を変更せざるなり。命にかけて帰するなり。いかゞなれば宗教心の帰する処の主尊は宇宙唯一無二の真理の源に在まして、いかなるものも変

へることの能はざる尊靈に在ます実在者なればなり。

唯一の尊靈なる如来が満腔の慈愛を以て我を愛したまふことを信ずる時は我も満腔の愛を以て如来を愛念せざるを得ぬ。如来は絶対無限大威靈と大自在と大慈愛とより我らを愛したまふ慈悲からして、いと麗はしき慈悲の面を表はして我を愛し給ふことを示したまふ其慈悲の表現に対しては実に我等は愛慕恋念せざるを得ぬ。眞実に宇宙間唯一無二の靈的人格現に対しては我らは愛念せざるを得ぬ。宇宙全体の大靈より表現したる人格表現なれば其所現の身の大小に拘らず絶対の表現なりこの靈的表現の弥陀より外に自己の絶対的に帰命信愛するものはなし。斯の如来に全身全生命を献げて仕へ奉る程自己の希望なし。弥陀に帰きて余念なき態が即ち是れ正しく自己の安心決定なり。我全生命を献げて弥陀に帰する所に我は既に是如来の所有なり。我既に如来の所有となる時はまた如来は即ち是我有なり。眞実に弥陀を信愛して献げたる我全生命なり。弥陀を離れて我生命はなきものなり。故に云何なる事情の下にも自余の神に信

愛の念を移転することなきなり。恰も貞婦が夫に對する情操が、命にかけて夫に獻げたるよりは堅き弥陀に對する信愛の情操なり。

或る光明會員の内に表榜せらるゝ如き善女人あり年久しく弥陀に歸し念仏をつとむ。予は曾てこの婦人は最も情操の全き信仰家なりと想ひたりき。偶或人の説を聞くに某善女人は近頃或種の神を尊崇し信仰しをれりと。予は之を聞いて彼の善女人にして凭る迷信に惑はさるゝ如きは有ることなからむと或日某女人を訪問し徐ろに問ふ。「或人の説によれば貴姉は近頃或る某神を信ずると聞けり、実に然るや、予は貴姉の如き堅固なる安心を立て唯一の弥陀を信奉する善女人にして斯くの如きの信仰に入るとは恐ろしくは然らざらんと。而し乍らまた何かの事情の為に止を得ざる故ありて他の神を信ずるに至りしものなるか願はくは実を以て貴姉の信仰の状態を聞かしめ給へよ。」と某女人答へて曰く「妾は弥陀に歸して他の神に仕へずまた他の教会にも出席せしことなかりき。」と。尚更に問ふて曰く「然し貴姉の安心願くは一大事の事なれば、如実に

貴婦の安心を告白し給へよ、予は実に貴婦に満腔の同情を以て或は萬止を得ざる爲に他の神を信じたるなれば実の如くに答へ給へよ。正直の頭に神宿る貴婦の正直なる処に神は感応し給ふべければなり」と問ければ、女曰く「若し信仰の安心が未だ曾て決定せざりし時に他の神を信じたりしに、後弥陀に歸し奉ることを得たり。然るに若し旧来の神に對する信仰を廢する時は其神の怒りに触れて生命を奪はるゝと云ふ場合は云何に候や、縱令生命を奪はるゝとも其神を信じてはならぬものに候や、生命には替へられぬ故に其神を信じても弥陀はゆるし給ふものにて候や」と。其女の問はれしにより、予は答へて「其は弥陀に一任したる婦命の信仰が貴女に安心決定したる上は既に弥陀に歸したる身なれば縱令旧来の信仰を廢したる爲に其神の怒りに触れて生命を奪はるゝとも、それは弥陀に任したる上はいかに決心すべきやは貴女自己の情操に存する処を以て決すべきものにて他人に問ふて後に決すべきものではない。其安心の決定は貴女の一心の決定である。若し例を以て云はば貴女が夫の家に歸きたる後自己の運命は

すでに夫に任せ而して夫は最も自分の理想の良人、家柄と云ひすべてに渡りて自己の希望を満足せしむるに足る家に嫁したることを実に自己は幸福なりと内心常に悦びたりしに、自己の夫は此良人の外に在る無しと決心したりしに、他にある男子が貴女にせまるに、我妻に為て給へよ、若し我意を容れざりせば我は貴女を殺害せんと脅迫せらるゝ時は貴女其時に當つて云何に答ふるや。縱令生命を害せらるゝとも其仇し男に随はざるべきや、將た生命には替へられぬ故に其男性にまた一身を帰任すべきに決定すべきや。貴女は此を自ら決定すること能はざる故に他の同意を得て後何れかに決すべきや云何。若し自己の情操に決定すること能はず、他人の同意の下に初めて決心すべき如くならば、斯の如き不貞の婦女、其情操の美として取るべき無きものなり。斯の如き貞操なきものは其に先だちて貴女の夫は貴女に離婚状を与ふるならん。肉体の結婚已に然り。況や心靈上の最神聖なる帰命の婚に於てをや。自ら反省したまへ。無智無力罪惡深重の凡夫、墮獄必定の身が遇難くして弥陀の本願に値ひ生命を献けて大悲

の救済を仰ぐべき身、一度弥陀の容るゝ処となり身の幸を悦びるたりしにあらざや。  
縦令生命を奪はるゝとも決して不動の信念を立て全生命を帰献したる上の情操に於て  
始めて真実に麗はしき信が加はり、智慧もなく徳もなく何一つ選取すべき無き身が弥  
陀の容るゝ処と成りしを思へば生命何の惜きことあらん。貴女が信仰の貞操いかゞ、  
情操は貴女自身の情操にあらずや。貴女の人格が弥陀に選取せらるゝや、捨てらるゝ  
やは貴女の弥陀に対する貞操の云何に存するにあらずや。また貴女が信仰の価値の真  
と偽とは貴女の情操の云何によつて決定すべきにあらざや。是弥陀に対する安心てふ  
心の安置く処を確乎と決定すべきなり。貴女自から決せよ。是貴女が弥陀に対する貞  
操なるか不貞腐の安心なるか二つに分るゝ分岐点である。斯くの如くに一度弥陀に結  
婚したる爾降の情操と意志決定とはいかななる事情の下にも動揺せざるを安心決定した  
る念仏、即ち如来と二人一つになりし心なり。

## 起行の念仏

起行の念仏とは、前の安心を成立せしめんが爲に弥陀の恩寵を獲得し眞の信仰生活に靈的生活に入らんとした靈的生命として活動行爲するの實行方面なり。眞実に弥陀と結合して我は弥陀の子、弥陀は全く我父また我夫として其大なる恩寵にまた光明に依つて自己の靈的生命が成長せらるゝ増上縁となる。光明が即ち弥陀なり。弥陀の恩寵また光明を獲得するの方法は即ち念仏なり。

弥陀より衆生の信仰心に与ふる靈妙なる力を光明と云ひ此光明を仰ぐ心を信念とす。光明とは例へば太陽の光の如し。如來の光明靈力を獲得する人の心を念仏と云ふ。もし光明を獲得して健全なる靈的生命を得むと欲せば先づ念仏三昧をつとむべし。

一心に念仏して心靈の生活に入れば、植物が始め種子より萌發して根莖を成し開華

竟に実を結ぶが如くまた人の子が初め胎児より胎内に發育せられ分娩出生し漸次に成長する如くに心靈的生活の生命が向上し發達し靈的生活の養成する起行を念仏起行といふ。一心念仏して向上する過程は弥陀の種子を播して種子に具有する性能が開発して竟には諸仏と同じく無上正覺の結果を得る。此の種子を成就せしむる増上縁が即ち念作三昧である。斯の時に種子を播布するは即ち安心である。即ち如來を信樂して欲生の心を増長せしむるは起行念仏である。

仏を念じて仏の増上縁を被むらんに初めは未だ信仰の如來の實在を認信するの意識もなく、胎内の子が血に養はるゝ如く、次ぎに嬰兒の乳汁を吞む如くまた信念の中に靈的法悦等の妙味あるを覺えず、家庭に於て父母に誘はれる朝夕の禮拜式をつとめまた讚歌を歌ひ称名を称ふ如くまた如來の眞理を教典によつて知り得る如く、念仏三昧及び禮拜讚歌等は信仰心を養ふ資料なり。中に就て念仏三昧を正中の妙行とす。

若し念仏三昧を以て靈的生命を長養するの妙行なりとするにあらざれば我等が靈性

の開発は得て望むべからず。念仏は太陽に向ふ如くに如来てふ心靈の太陽に向て向上す。如来は真善美の極にして斯光明に向ひて念ずる時は信念の心も益々向上す。念念弥陀を念ずれば自己の心も漸くに弥陀に同化す。要する処は弥陀は萬徳円満にして欠ることなき靈体にして、無量光明の発源体なれば、念ずる衆生の心の程度に随つて不思議の力を得て信念漸く増進す。始めには信心喚起の増上縁と為て念仏するに随つて心靈喚起する起行と為り、次に念仏三昧の如来の光明は信心開發の増上縁となる。次に念仏三昧は心靈的人格の果を結ぶに如来の光明が増上縁と為る。

## 南無の二義

南無と云ふは仏教にて自己は罪悪苦惱の凡夫、自己の力にては解脱も成仏もできぬ者なれば之を救済して下さる自己の信ずる神尊に對して我全生命を獻げて信賴する至心を表はす言であります。今は我らが一切の神明に起て最尊たる大慈悲の父なる阿弥

陀尊だそんに對たいして己おのが全生命いのちを獻さげて救度すくひを請求おねがひする至心まごころを表あらはして南無阿彌陀仏なむあみだぶつと云いふのである。此こゝには自己おのれの最大さいだいの要求えうきうありて、すべてをあなたに投込なげこんでしまつて救すくひを仰あふぐのである。南無なむとは梵語ぼんごにて種々いろくの訳やくがあるけれども今は先いまづ二義ぎを以もつて阿彌陀あみだ仏ぶつに命いのちを歸きして信賴しんらいする意義わけを述のべんとす。

一、我われを救すくひ給たまへ

二、我われを度どし給たまへ

この二義ぎである。前まへのは自分じぶんは苦くで、空くうで、無常むじやう、無我むがなる生死しやうじの苦くを生うまれ乍ながら有もつてをる凡夫ぼんぷにて自分じぶんの力ちからでは解脱げだつできぬ者ものなれば、如来みよやの大慈だいひの力ちからを仰あふいで常住安樂つねにあんらくの中なかに救すくひ下くだされと云いふことにて、後のちのは、我われは罪惡深重つみふかかくにて弱点じやくてんのみの自己じぶんにて、自分じぶんの力ちからにては至善圓滿りつぽでえんまんなる仏ほとけに成なることのできぬ者ものなれば願ねがはくは如来みよやよあなたの御力おちからによりて我われをあなたの御子みことしての靈德とくを成就じやうじゆさして下くだされと云いふ意こゝろである。また前まへのは自己おのれの生命いのちを全まつた如來みよやの中なかに投込なげこんでしまふて、永遠とほの生命いのちの光明くわうみやう中に生うまれ更かは

らして戴くこと。後のには既に如来の救を被むり心が生れ更りて光明中の我として光と力を被むりてあなたの聖意をば此身を以て働らきに現はしてゆくことである。即ち人格向上を仰ぐ意義である。この二者の要求は哲学者のカントが謂ゆる最幸福と、最高徳を要求することである。カントが此世では最幸福と最高徳との両方を完全に備へることはできぬ。最幸福と云はゞ健康で富豪で名誉ありすべての物質的の満足を得る者を云ふ。此に至つて幸福な人とても必ずしも人格の円満なる道徳家と云ふ訳でなく、亦最も人格の高い道徳家とても必ず富裕な長寿な幸福な者と云ふ訳にゆかぬ。神の国に於てのみ最幸福と最高徳とが完全に具備することが得らるゝ。神に於てのみ得らるゝと。南無の二義なる、救我と度我とは此の二者の要求を意味す。救我は此生死の苦に沈むべき不幸な我を救ふて永劫の光明中に最幸福な我にして戴きたいと云ふこと、度我とは此弱点の甚しい罪惡の我をあなたの御力にて聖意にかなふ人格に御育てを仰ぎますと云ふ意味である。

ミオヤなる如来にの、衆生しゆじやう（子こ）に對する思召おぼしめしは最幸福さいかうふくにして而しかして最も高德かうとくな、福徳ふくとく圓滿まんまんな身みにしてやり度たいと云いふ処ところにある。そこで南無なむと云いふ子この方ほうより我われを生しやうじ死じの苦くを離はなれて最も幸福かうふくなる極楽ごくらくの人ひととして戴いたぎたいと、また最高徳さいかうとくなる仏ほとけに成なり度たいからあなたあなたの光明ひかりを以もつて無限かぎりなきに向上すゝみさせて戴いたぎたいと云いふことである。而しかして今いま如来みよめの光明ひかりの中に心こころの生うまれ更かりたる時ときは必かならずしも命終いのちおはるを俟またずとも精神せいしん的に其分そのぶんに應おうじて此この二者しやの要求もとめを満足まんぞくして下くださるのが如来みよめが私共わたくしどもの信仰しんかうに報むくひ下くださることである。其意味そのいみを是これから説明とまめます。

我われを救すくひ給たまへ（我われに最幸福さいかうふくを与あたへ給たまへ）

我われを救すくひ給たまへとは大慈だいひの父ちちよ、私わたくしは今罪惡深重いまつみふかきなる者ものにて現在げんざいにも未来のちのちにも、身心しんく共に苦くるしみ悩なやみ、種々いろくの憂愁恐怖煩悶うれしきおそれまたえのつひに止やむことなきものであります。未来のちのちも地獄ぢごくの炎ほのほに焼やかるゝ外ほかなきものなれば絶対大なるあなたあなたの御力おちからによりてあなたあなたの大慈光だいひくわう明中みやうちうに救すくふて戴いたぎ永遠えいゑんの生命いのちとして活いかし下くだされ。私わたくしは全生命すべてのいのちをあなたあなたに献さげて投なげ込こん

でしまひます故にあなたは我をあなたの所有として助け下され。此罪と愆とにて永劫  
浮ぶ瀬なき我をあなたの聖意に投歸してしまふてからは、今迄の自分と云ふものは認  
めませぬ。此に於て有ゆる罪も業も悉く大悲の光の中に融込でしまふて全く救はれた  
身となる。

救我の我に、未だ救はれざる我と救はれた上の我とは天地雲泥の差がある。生れた  
まゝの我は、肉の我動物的の我にて、人間てふ狡猾な罪を造る我、神心を煩悶し悩乱  
する我である。有ゆる動物中に最も精神の煩悶や苦悩の多いものである。而して世の  
文明に進めば進む程心の煩ひが重くなるのである世の凡愚の人は唯物質欲の満足を得  
れば幸福は其中に在るものと思ふてをる。人生自覚のなき者の物質の満足は還つて己  
を苦しめる本であることを知らずしてをる。金銀財宝必ずしも人生を幸福にするもの  
でない。凡愚物質欲に満足を得て之を以て至つて幸福と自からきめてをる。動物性に  
甘んじてをる族の如きは人生の意義を語るべきものでない。苟しくも人生の意義に對

して心意を注ぐに到らば、必ず人生を精神的に価値を発見せんとすべきである。

我教祖釈尊が若くして王宮に在りし時、人生問題に痛く煩悶したまひ縦令王位を履むとも老病死は免るゝこと能はず。いかに富四海を保つとも、無常と苦空とを遁るに由なし。人生の苦、生死の悩はいかにして之を解脱すべきものぞと、此が皇太子をして、尊き王位を破沓の如くに捨て上無き榮華を価値なきものとして入山学道してつひに臘月八日の暁に、人生生死の重荷を捨て常楽永恒の光明界に入りなされた動機であつた。釈尊が人生の重き苦悶を解脱して、弥陀常楽の光明中に神を安住するに到りしは、これ宗教的に云はゞ、弥陀の光明に救はれたる状態である。

何人も未だ救済の実を得ざる間はよしや物質に満足を得やうとも精神には眞の満足と眞の幸福を感じることはできぬ。

先日或求道者に問ふた、あなたは自己精神中に総てのことを暫らく放棄してしまつて全く赤裸々の我に為つて見た時に何の感じがしますと。其人の曰くさう云ふ時に何

となく唯不満と不安とが感じられますと。どなたでも正直に告白したならば、これに帰するものであると思ふ。赤裸々の我に不満と不安との感じのないと云ふは外部のことに紛れてをるからで、自から知らずしてをるのである。

赤裸々の我に不満と不安の感じあるはこれ何人も宗教を要求する性能が具はつてをるからである。人間の思想や感情と云ふものは世の外界の事に紛れ易いものである故に、是非宗教を求めて、ミオヤの救を受けて始めて真の赤裸の我に満足と安心とが得らるゝのである。先年ある村の村長に対して宗教を求め給へと勧告したけれども、村長氏は自分はどうか考へても宗教の必要を感じることが出来ないと言へた。漸く一年経た翌年再び会ふた時は、前とは全然變つて自分の方から切りに道を求むる心が熾に起つてきた。それは最愛の女に先だたれた為であつた。苦し全く人の性情に欠如なくば最愛の乙女が死なうとも自分が死の宣告を受けやうとも或は驚怖、或は悲傷する筈は無からう。然るに凭る場合に臨む時は何人も忽ちに感情に欠陥の現はれ来り、或は恐怖

し或は哀悼に耐へぬ感が起り来るに相違ない。これ何人も、ミオヤの救ひを求むべき性情を具有する兆候である。未だ救はれぬ我には、外界の眼前に自分を眩惑するところの眼や耳また口腹の快楽などをさけて赤裸の我と為つた時は、何にも我に慰安するものもなく内容を豊富に楽しましむるものもなく、唯不安や寂寞の感のみであらう。而して過去を顧み将来を慮り取越苦勞や種々の憂愁や、恐怖は常に襲ひ来りて我を悩ますであらう。凭る時に天にも地にも彼が心に入り来りて彼が総ての悶や悩を取り去りてえも云はれぬ天上界の歓喜と妙楽とを齎らし来りて慰むるものはない。故に未だ救はれざる我は実に不幸なものである。

救はれた上の我。先の我は人間の子としての我、煩悶や苦悩を集めて我としてをつた故に、外界の僅の刺激にも直に破裂して、自ら苦しみ悩む性質を以て充滿してをつた。今度は従来の生れたまゝの我は実にあてにならぬもの、又苦しい我なるを自覚して始めて大悲のミオヤに帰命して永遠の救ひを求めた訳である。いと狭い悩の我を絶

対無限の大悲の光明中に、投込んでその光に融合ふて全く救はれた身となる時は、今迄の罪と悩の我でなくて尽十方無碍の光明中に天地広く日月永く常楽我浄の園には真善微妙の花匂ひ、法悦の樂しみは是れ如来他受用の妙用にて禅悦の歡びは是ミオヤと共に受けるみ子の情となり、永遠の生命と常住の平和はミオヤの中に一切の子等と共に享受する真の靈福と感じらるゝ。

已に救はれてからは身はまた娑婆に在るも神は浄土に道あそぶ。肉眼では昨日に替らぬ憂き世の中も、心眼を以て見る時はこゝも即ち安楽の都、蓮華蔵の世界なれども我等は生々の習慣世々の余習気に食はざれば忿も発せざるを得ぬ。然しいかに忿の炎の中にも心の前に大悲の面影笑を含みて在ますと想ふ時は怒の炎も自づと消ゆる。或は悲哀に襲はるゝ時も口に我を救ひ給への南無の前には、阿弥陀大悲の親様が無限の慈悲を以て慰安て下されば、有難さに充されて悲しみも転じて菩提の縁となる。すべて何なる苦しきも悩みも如来の慈悲の中に融合ふからは永生の樂と化す。已に救は

れし上は無限の光明中に無上の幸福を感じらるゝ。されば形は娑婆に在り乍ら神は常楽の光明中に安住す。其光明に只自己一人のみではなく大ミオヤの中に世の総ての同胞と幸福を共にするのである。

何にせば救はるゝか

諸君は上の如くに已に救はれた上には身は此土にあり乍ら心は常楽の光明中に眞の幸福の日暮しが出来うると聞く時はどなたもその希望が発るであらう。然らば如何にせば救はれることが得られようと、問ひなさるでせう。此救を得る道に二通あります

一、聞信 二、修信

聞信と云ふことは、実には健全なる信仰の道ではないが、眞宗杯には連りに唱えてをる故に暫く之を許して信を得るの一端とす。聞信とは即ち知識の教を聞いて能く其安心の趣旨を徹底して全く光明を獲得すること。二に修信とは一心の念仏して直に弥陀の光明に触れて慈悲の中に融込で光明中に安住すること。初めの聞信は眞宗にて

は能く弥陀の慈悲を聞て、信心の真を得る時は歓喜の一念に無為金剛の信を得ると云ふ。また信心は凡夫の心に非ず。仏心である。其仏心が凡夫に授けられ給ふ時に信心獲得したるものである。亦信心獲得とは第十八願を心得ること、即ち南無阿弥陀仏を心得るのである。南無と帰命する一念に発願回向の心、如来より凡夫に回向し給ふのである。此時凡夫無始の悪業悉く消滅し正定聚に住し煩惱を断ぜずして分に涅槃を得ると。若し此に到れば既に救はれたる相とす。救我の方面をのみ勧むるのは真宗の伝道である。如何に口に称名すとも全く自己を献げて如来の真を得ざれば無効に帰すと。已に信心獲得してよりは只報恩のために称名すべしと。救我の方に就ては浄土宗の主張よりは真宗の方が勝れたるやに思はる。

浄土家の勧むる処に依れば、若し之を剣道を学ぶに、例へば平常の念仏は剣道の稽古やまた試合にして、臨終の念仏のみ真剣である。たとひ平生いかに習練を積むとも若し臨終の真剣にして敗を取る時は平生数十年の念仏も悉く水泡に帰す。真実の救を

う得るの事實は正に臨終の一刹那に在りと、是れ浄土家の安心であると。凭りければ今  
 現に浄土家の伝道家と雖も、自分は平常念仏するものゝ、往生を得るや否やは臨終の  
 後でなくては未決定である。臨終の往生が即ち救済の実であると。故に浄家の伝道家  
 謂らく、平常はいかに念仏するも救はるゝや否やは未決定であり、夫が信心歡喜とか  
 また感謝念仏と云ふことは謂れなきことである。故にもし偶念仏者にして歡喜とか  
 感謝と云ふ語を聞く時は彼等は之を異安心として排斥する。亦甚しきは念仏は唯死  
 後の為にのみ唱ふべし。現に如来在ますとし直接帰命の想を以て念仏する如きは宗の  
 本意に非ずと。斯る訳なればある浄家の勸方にては、我を救ひ給へと云ふ念仏にて救  
 を得るは臨終に拘はるものとす。

教祖釈尊聖法然の精髓を仰ぐ吾人が我を救ひ給へと念仏は其趣を異にす。我等  
 は必ずしも、臨終を待たずとも今日より疾く救はれて光明中の人となるべきことを  
 勧むるものである。

我を救ひたまへ

我を救ひ給へとの要求はかやうである。我等は本如来より受けたる仏性を具へてをると共に衆生の煩惱の皮殻を被むつて居る。仏性は雞の卵のやうなものにて自づと独りで孵化るものではない。生れたまゝの我は煩惱の張本にて罪惡の源にて諸の苦惱の我である。煩惱の我のみ勢力を持て居る故に常に罪を造り苦を感じて生々世々永劫に安き事は出来ぬ。そこで今は從來の我を弥陀のミオヤの慈悲の中に投込で攝取の光明に同化せられん為に、南無阿弥陀仏と言の如くに心をミオヤに帰し奉りて念々相續して至心不断なる時は、喩ば雞卵の孵化して皮殻を開き裂つて雛子と為る如くに仏の子と生れ更る。これが救はれた我である。

救ひを得るとは信心獲得と同じ心である。弥陀の慈光に融合して卵子が卵殻より出て雛と為る時は広き天地の空気を吸ひ明き光の中に出たる如く、已に信心開く時は得も云はれぬ靈感や有難さを感じらるゝ。釈尊が六根常に清らかに光顔永しへに麗はし

く在せしは、弥陀の光明中に心の生活をなされ給ふことの現はれなもので、聖法然の如き、其他の弥陀の光明に触れて靈に生ける人は、本の生れたまゝの我でなく弥陀の靈光に復活した我である。是を救はれた我と言ふ。凭やうに本の動物の我を獻げて御子の靈徳の我とならんが爲めに我を救ひ給へと阿弥陀尊に要求するを救我と云ふ。

眞宗の信者が已に信心得たる上は夜を昼に紹ぎて幾度となく我の救はれたるを喜びて之を思ひ出しては有難うございますナムアミダ仏と感謝す。幾度び感謝しても幾度び感謝しても尽くる事なき有難さである。已に救はれた上は、三惡道に落つるにきまつて居つたものが慈光の中に救はれたのであるから実に之を思ひ出てさへ感謝の称名を禁ずることが出来ぬ。此段になると從來の浄土家の信者が現在では救はれる事は不可能である。全く死後ならでは救はれぬと言ふ流義は、眞宗の現在より救済を蒙むりて光明中にいと幸福な感じの中に報恩の称名唱ふる信者の方が幸福と云はざることを得ぬ。されば彼の門徒はアゝ幸福ものよと自ら感じて報恩の称名を洩してをる。

真宗の念仏は救はれた上の仕合せを感じて称名する身となりしは実に幸福である。然れども唯念仏を救我の方のみに偏して更に進んで信後に我を度し給へとの向上の大意提心の信仰なきは大なる欠点である。信仰に依て真の幸福を得るは可なり。然れども積極的の宗教生活として人格の向上を求むるは信仰の真価値なるものである。人生の真意義は人生は最終至善の極所に向つて其光明中の向上の一路として意義ありまた価値あるのである。若し宗教を唯生の苦、死の怖を離れて永恒の常樂即ち幸福を求むるのみならばいかに信仰を得て精神的に幸福を得たからとて身体生活の苦は免がれぬ寧ろ疾く死して浄土に生れんには如かじ。左はなくして人生には積極的の意義あることは救度なる人生向上の大道に於て信知せらる。大乘仏教の真意を得ざる或念仏者の現在に於ては救はるゝ事不可能であると偏する信者や、又真宗の如き弥陀の光明に人生向上の無上の力あることを解せざる欠点ある教より進んで吾人はミオヤの真意を信じて如来を念ずるものである。

我を度したまへ

(我を仏の子として円満な人即ち仏として下さい)

既に救はれた我は心霊が生れ更つた精神生命となる。然る後は我を度し給へとの大  
 菩提心を発せる仏子である。仏子は上はミオヤの円満なるを理想として向上を旨とす  
 べき意志でなくてはならぬ。度とは梵語の波羅密の事にて到彼岸として現在此岸の我よ  
 り人格が向上して最上至善の円満なる道徳の究竟せる仏の位なる彼岸に進んで行くこ  
 とである。度我の念仏は如来よあなたの聖意を被むりて恩寵の光に依りて私の道徳心  
 を育て、円満なる人格即ち仏にして戴き度いと希求を南無阿弥陀仏とす。真宗では  
 救はるゝ目的は只仏の中に無上の幸福を享受することである。それを得れば只感謝す  
 る外はない。此外には如来に對してもう要求する所はないときめ込んである。如来を  
 唯慈悲の深重な母親とのみ信じてをる。尚進んで如来は神聖と正義とをも有してをる  
 大慈の父である。母として子に對する願望は我子はすべての苦惱を脱して永遠の生命

常樂の幸福を得させたいと言ふ所にある。父としての弥陀の我らすべての子に対して望む唯夫のみでは満足できぬ。父なる如来は我等を人格向上させて仏子の働き、世の天職（菩薩）を志し、無上の願行を成就させて円満なる人格、善き人となしたいと言ふ望を以て子を育み給ふ。但し世の親として我子に幸福な身、安心のできる身にしてやりたいと言ふ望は勿論なれども、更に進んで人格を高等にしてすべての人に愛敬せらるゝやうに尊き人格にいたしたいといふ望を持つてをる。

されば往生論註に曰く若し人但極樂の受樂無間なるを聞て樂を貪ぼるが為に往生を願ふは不可である。抑々往生を願はんものは願くば仏に成りたいとの心を発すべきである。其の仏になりたいと言ふは仏に成らねば一切衆生を度す事ができぬ。衆生を度したき故に我仏に成りたい。而して一切衆生と共に普遍的に安樂を得たい。即ち一切と共に永恒の安寧を得たい。是が願往生の菩提心である。之が如来の聖意に合ふ志であると聖曇鸞が釈し給ふてをる。我を度し給へと私を向上させて戴き度いとの望は

まづたじふの聖旨に對する子等の志願である。諸の菩薩は波羅密万行を以て益々向上し一切の善を修して無上の仏果を期す。

願はくば我如来の御子として諸仏の如くに円満なる人格仏になりたいとの最上高尚なる最上遠大なる希望とは阿弥陀仏と言ふ最上極致の至善の都に在ますミオヤの御許に到達すべき心意である。然るに聖道家の菩薩六度万行はミオヤを離れ自ら之を遂行せんと欲するが故に甚だ至難な事である。今念仏の度我の波羅密は大慈父の恩寵の光を被りて向上するが故に至易である。

私共にミオヤの光明の道德的靈化の御育を被むる次第は例を以て言はゞ天の月と日との関係の如くである。月自身には元光なき物である。日光の反映即ち冴かに照る月光と為つてをる。月が初め二三日の新月より十四日に至る迄に漸次に月の光に盈てゆく。我を度し給へとの念仏は私共の菩提心の月が弥陀の日光加はる毎に一夜々々に光を増すべく道德の向上を期することである。次第に光が加はりて十四日夜に至

ることを菩薩の満位とし既に十五の満月と為りしは之を菩薩の地を超て仏位に到つたのである。

## 人生最終希望

人生最終の希望は我を渡し給へと言ふ念仏に依て満足することを得。念仏は人生の生命である。無量寿と為るはミオヤの賜である。また念仏は人生向上の大光明である。靈の生命の源泉である。若し弥陀の光明に指導され靈上される人は必ず無上仏位に到ること必せり。人生の最終目的は那辺に在るぞとなれば二方面より人生の帰趣する真理を信知することを得。一方は宇宙の大法に随順して最終至善の極に到達す。一面は自己の心の奥底に潜伏する靈性を開發して円満なる人格を完成す。人は宇宙の大法を離れて活きることは出来ぬ。また宇宙の根元に還ることもできぬ。故に宇宙の大法に則らなくては至善の極に到ることできぬ。また一方の自己の奥底に伏在せる本

能性に具有せるものを發揮する事は不可能である。寶石の資材でなきものをいかに琢磨すとも光輝を發するものでない。

阿弥陀仏は宇宙の大法より一切衆生を最終の至善なる無上仏地に攝取して、円満なる仏と為さしめん為の大光明者である。若し弥陀の光明を離れて一切衆生の成仏すると言ふ理あるべからず。太陽の光を離れて此肉体の生活し能はざると同じことである。されば過去の一切諸仏もまた現在の善逝も悉く念弥陀三昧に依て正覺を成ぜりと經に示されてをる。

弥陀の無量無辺の光明また清淨歡喜智慧不斷等の光明は遍ねく法界を徧照して在ますは一切衆生の心靈を開発して円満なる人格即ち成仏させんが為の大光明である。また一面吾人一切衆生には元より法身仏より受たる仏性を具有す。之を靈性とも言ふ此仏性が即ち吾人の仏となり得らるゝ性能である。法身より受けたる吾人の仏性は必ず報身の光明に攝取せらるゝにあらざれば靈化して仏となる事が出来ぬ。吾人が人生

の最終目的はミオヤより賦与せられたる靈性を發揮して円満なる靈格即ち仏と為つて始めて完成したのである。

此目的を達せんには宇宙の大法なる一切衆生の心靈を攝取し靈化し給ふ弥陀の光明を仰がざるべからず。弥陀の光明には一切衆生の心靈を靈化し給ふ不可思議の靈徳を具備し給ふ。其の如來の神聖と正義と恩寵との光明を以て我ら子等の心を道徳的に向上さして下さる。我等が御育てを被むる万徳の中に於て三四の徳目を挙げて述るならば一心に念仏して弥陀の慈悲心に同化する時は他人に対して親切の心と為り、悲しみ悩める人には同情心に富みて他人の苦みが我が苦の如くに感ぜられ之を安からしむるやうにする。他人の喜びをば我が喜びと感じらるゝは之を布施波羅密と言ふ。初めには人間の心ばかりが働きて仏子の心は現れて来ぬけれども此処が我を度し給への念仏なりと思ふて如來の加被を仰ぐ時は道徳心が力を増すやうになる。すべてに渡つて波羅密とは向上進歩することである。正義波羅密は戒度とも言ふ。如來神聖の光明に

照らされて自己を反省する時は自らの邪や悪きことは全く聖旨に契はざるが故に矯正して正直な善き心に成りたいとの向上心が増進するやうになる。人生は全く円満なる人格に向上すべき修業の道場と信する時は縦令他人より罵詈譏誘らるゝとも是ミオヤより我が鋳鉄を鍛錬して菩薩の名刀と為さんがための御方便と思へば何なることも安忍せらる。経に菩薩に常の師はない。若し己が欠点を指摘し非難を加へ己が短所を能く見出して誘ふ人こそは我を矯正し給ふ恩師とせよとの御聖訓辱けなく感じらるまた経に縦令悪人の為骨々相挫かれ節々支解されても甘露を飲む如くに忍べよと教へ給ふ。

初めにはなかくに忍び難き事をも歩々に進むべく御育を被むるのちには安じて忍ばるゝやうになる。

人生はミオヤより受けたる鋳鉄の心性を報身の光明を被むりて鍛錬すべき修業の為に遣はされしものと思へば益々勇猛に進みて何なる難事にも勇気を鼓舞して当ること

を得るのである。また各自の職業はミオヤよりの使命なりと信じて業の貴賤に拘はらず念仏の光明中に勤勉努力する時はいかなる業務も波羅密なりと自覚せらるゝ。

一心不乱に念仏し如来神聖の光明に琢磨せらるゝ時は金剛石の如き玲瓏たる人格の光彩を放射するに至らん。また一心に念仏して一心の明鏡研磨する時は如来神聖正義の光が自己の意志に反映して尊とき人格の光を放たん。

若し念仏は只救我の一面にして真の幸福を得るのみを以て目的とする時は此の娑婆即ち忍土に処して空しく生活の苦を受くるよりは疾く浄土に往きて法性の常樂を受くるに如かじ。其反面なる度我の念仏即ち人生を光明中に向上の行路として始めて此忍土の精神生活の真意発見することを得。衆生が向上して成仏を期せんに此世界には寒熱の氣候、水火風雨等の災禍あり。また人為的にも悪人の為めに逼悩せらるゝの難あり。凭る処に於て修行せば吾人無始以来錆つきたる仏性の名刀を磨くに、荒砥を以て荒錆を去ること還て疾き如くである。されば経に此土の一日一夜の精練修行は彼

の浄土じやうどに於おて百歳さいするよりは勝すぐれたりと。若もし此土このどは吾人ごじんが仏性ぶつじやうを鍛練たんれんすべき修行しゆぎやうの道場だうぢやうなりと信しんずる時は吾人ごじんの心靈しんれいを琢磨たくまし鍛練たんれんするの道具だうぐ能よく備そなはれり。度我どがの念仏ねんぶつ我われを今いまの不完全ふくわんぜんより完全くわんぜんに趣おもむかしめ給たまへ。現在げんざいの未成品みせいひんより仏子ぶつしの品性ひんせいを成就じやうじゆせしめ給たまへ。我わが此土このどに遺つがはされし使命しめいを果はたさせ給たまへとの度我どがの志願ねがひを成就じやうじゆせんには寧むしろ此この忍土生活にんどせいくわつの価値かちあるを覚さとらるゝのである。

## 信心喚起の因縁

因いんとは人ひとの先天せんてんの心こころである。人ひとの心こころの大本おほもとは一切さい悉有ことごとくぶつしやうあり仏性ぶつじやうとて皆仏みなほとけと成り得えらるゝ本性ほんじやうを有もつて居ゐる。其それは衆生心地しゆじやうしんぢと云いつて土地とちの様な物もので全体土地ぜんたいとちが荒蕪くわうぶして悪草あくさうが蔓延まんえんして居ゐるのは土地とちが悪わるいと云いふので無い。良よき土地とちでも耕たがして良よき種子たねを播下はんげせざれば良よき植物しよくぶつの実みを結むすばせることは出来できぬ。人ひとの心性しんじやうも本仏性もとぶつじやうでふ田地でんぢがひひに荒蕪くわうぶして煩惱ぼんなんの悪草あくさうが茂しげつて居ゐる。此これを開拓かいたくして「仏種縁ぶつしゆえんより生しやうず」と云いつて仏ぶつ

種子しゆしを播まかねばならぬ。仏性ぶつじやうの田地でんちに喩たとへば硬地かうちと沃地よくちとある如ごとくそれを宿因しゆくいんとして居ゐる。宿善しゆくぜんとは前生ぜんじやうにて已すでに信仰しんかうの基礎きそが出来できてある者は沃地よくちに種子しゆしを下くだす如ごとくである。無宿善むしゆくぜんの人は硬地かうちの如ごとくである。假令たとへりやう良田りやうでん有あつても好種子かうしゆしを播まき培養ばいやう宜よろしきを得えて豊富ほうふなる收穫しゆくわくがある如ごとく師友しいう善智識ぜんちしき等の縁えんによらざれば信心しんふ成熟せいじくできぬ。

## 下 種 懺 悔

信仰しんかうを得えて光明くわうみやうの生活せいかうわつに入いらんには先まづ土地とちの開拓かいたくを要えうす。人の天然性てんねんせいは動物性どうぶつせいの慾よくと惡意地あくいぢ不正見ふしやうけんの方計ほうけいり發生はつせいして土地とちに惡草あくさうが蔓はびつて居ゐるが如ごとき物ものである。我見がけん我愛わがあいの我儘わがまが仏性ぶつじやうの心地しんちを荒あらして居ゐる。之これを三障しやうの源みなもととして貪欲瞋恚どんよくしんい等の諸もろく煩悩ぼんなうが群むらり、業障ごつじやうと罪障ざいじやうと煩惱障ぼんなうしやうとの三障しやうありて心地しんちを荒あらして居ゐる。業障ごつじやうとは人が先せんてんてきに有あつて居ゐる個々まぢくの動物どうぶつの本能ぼんねんの貪瞋とんじん等の煩惱ぼんのうの外ほかに特殊とくしゆ的てきの形氣けいき氣質きしつを有もつて居ゐる其それは或あるは吝嗇りんしやくとか執心しゆくしん深ふかいとか勝負しやうぶを好このむとか突飛とつびな事ことを為なし又は浮氣うはきであると云い

ふ如き、こは先世の宿業から生れ乍ら有て来て居ると云ふこと、世間で云はゞ遺傳的の性癖等である。罪障とは現世に於て自ら身と口と意に造つた罪が障となること。煩惱障とは貪欲瞋恚愚痴を始としすべての弱点其等が即ち罪惡と云ふのである。自己の罪惡を懺悔するが信心喚起の動機と為る。然れ共宗教上の眞理を聞いて微なる光に依りて始めて自己の罪惡を感じらるるのである。

## 聖 種

人の心性は土地にて宗教心の種子を播すとは仏教に種々の種子が有る。五戒を全く持てば人道となり、四聖諦を種子として其結果は阿羅漢と成る。菩提心を種子とせば無上仏果を得る。喩へば梅の果種から梅樹が生じ杉の種子は杉樹と成るが如くして今阿弥陀仏の名号を種子として信念を修養せば其結果は阿弥陀如来と同体の覺りを得て無量の光を以て普ねく一切の眞理を照見し壽命無量にして永遠の生命と為るを結果と

す。名号の真理を聞いて此が信仰の種子と為るのである故、名号とは如何なる真理か其を能く了解すべきである。名号とは名は体を徴すとて阿弥陀如来をば經に其仏の光明無量にして十方の国を照して障礙する事無き故にアミダと名づく。又其仏の寿命及び其人民の寿命無量の故に阿弥陀と名づく。アミダ仏は喩へば天体に於ける太陽の如くに心霊界の太陽である。故に其名を稱ふる時は即ち如来の光明不可思議なるを念ひ阿弥陀の名に依て体を徴するのが即ち名号を呼ぶので如来の万徳円満なる如来を念ず即ち是信仰の種子である。要する処阿弥陀の名と体とは同一なれば名を稱ふれば意に仏を憶ふ。此の心念が増長したる終局には弥陀同体の覺者と成ることが出来る。阿弥陀の名体不二の名を以て種子とすれば必ず結果は如来と同体となる。念仏を本として仏の心と我等が心と合致して尚進んでは仏心仏行を為すのが目的である。如来は心霊界の太陽にして常に無量の相好光明普ねく十方を照し給ふ。斯光に依て我等が心と仏心と相應するのである処に信仰が出来る。

## 五種正行

唐の善導大師は五種正行を以て心靈を養ひ信念を長養する資糧と定められたり。

五正行とは一礼拝、二読誦、三觀察、四称名、五讚嘆供養の五行である。

(一) 礼拝とは自分は已に弥陀の聖子である。此聖き心を養ふことは恰も食物を以て此身體を養ふのと同じことである。礼拝とは或は教会にて衆と共に礼拝し又は朝夕礼拝式によりて是を行ふことは朝夕の食として聖き心を養ふのが目的である。故に至誠信樂の心を以て行ふべきである。礼拝の時は親しく如来の慈悲の温容に接し如来の大慈愛が我心に充ちたまふ事を念じ要する処は如来の清き聖心に換へて戴く処にある。己がすべての汚れたる心を捧げて如来の清き聖心に換へて戴く処にある。(次)に読誦正行とは聖經を読み自己の心靈を開発するにある。浄土經は積尊が自己の心靈界の實驗を啓示したる物なれば数々読む時は自己の心が開かれて靈界に導

かるる。例へば彼仏の光明無量にして十方の国を照し給ふに障礙する処無き故にアミダと名づく又極楽国土には常に天樂を作す黄金を地とせり昼夜六時に曼陀羅華を雨す等の言に此方の心も矢張り如来の光明の中に安住するの想また極楽の園林に逍遙するの想を起す。または是心仏を作り是心是仏なり諸仏正徧知海は心想より生ず等の金言に誘はれて我心も仏心に相應せしめんと想ふ様に為る。經を読むもまた師友知識から如来の真理を聞き得て信を取るも要するに自己の信念を開発し成就せしむるを目的とす。

(三) 觀察正行。冥想觀念を以て或は仏の相好光明を觀察し、又は浄土の莊嚴の相を憶念し、行住坐臥に觀念する時は始には想像に見え又は常に如来と共に在て離れざる事を想ひ、水を静めて月を浮べる如く明鏡に面像をうつし見る如くに仏の慈悲の御姿を映現せしむるのを觀察正行とは云ふ。

(四) 称名正行。称名にも三の意がある。請求と感謝と讚歎とである。請求と云

ふは如来の救霊を仰ぐ事、又光明の摂取を求むること。感謝とは如来の本願力に救はれて御慈悲の懷に抱かれあることを有難く感じて謝する事。称名亦念仏三昧とも云ふ。衆生一心に仏を念ずれば仏心が我心に入り給ふ。我心は仏心の中にあり。衆生心と仏心と融合して三昧の妙境に入る。

(五) 讚歎供養正行。新らしき讚歌を以て如来の聖徳を讚歎し、讚歎するに自己の心も如来の妙境に自ら逍遙するに至る時に情調に於て不思議の靈感を得らる。供養とは珍膳美味及び香華灯明等の供養最上なり。供養は自己の身心をすべて献げる心を以て仕へ奉るにある。

上来の五種の正行は心靈を養ふ糧である。真実の信を得んが為には至誠心でなければならぬ。

初の程は自己の心と法と能く調和が出来ぬ故に左迄に妙味を感じる事が無い。そこが修行である。益々進むに随て深く深く信心増長して靈感極りなきを覚ゆる様にな

る。此五正行は信心喚起の為計りで無く心靈を養ふ糧となれば終身捨る事は出来ぬ  
否自ら好んで止ることは出来ぬ様になる。

## 五 根

(一) 信根とは如来の真理を聞きて如来の恩寵を被むる時は必ず自己は若しくは解脱若  
くは救霊せらるることを信じて疑はず。如来は我親にて我は其子たりと信じて此信が  
基礎となり信の根底が確乎として又此信を發達せんが為めに次に精進根となる。

(二) 精進根。即ち精進は信仰を増進せんが為めの勤勉である。例へば米に糠垢あれば  
力めて搗く時は精白と為る如く一心專精に不斷に大光明者を念じて勇猛精進して時  
々心々連絡し念々專注して進む時は靈性益々發達す。

(三) 念根。弥々信念を專にする時は薰染身に功成じて常に如来を恋念羨慕して忘る  
る事能はざるに至るを念根と云ふ。

(四) 定根。一心に如来を念じて慈悲が其心念に薰染して久しければ遂に自己の心が如来心と成り如来の心自己の心となる如くに感じらるゝ之を定根と云ふ。

(五) 慧根。是信念の根が益發達して信心の喚起の明至りてわが如来の靈光に触れたる事を自覚して、其真理を身に実験し得て始めて始めて靈の覚醒となり、朝夕の讚美礼拝亦知識の指導が心靈を養ひ、至心不斷に念じ信念内に增長して如来の恩寵の和氣に催され、信仰の曙光を見心靈の擘瞳となる是喚起の満位とす。

## 喚起の二機 自修と伝承

一、自修。自誓受戒の如く、宗教的天才、又推励苦修、自発的に、自ら摩擦して火を發する如し。

二、伝承。伝灯師に相承する如く、木を焼くに他の木の火を他に伝へる如し、又小児が哺育せらるゝ如く、師友知識の心が感伝す。

## 心 靈 開 発

すでに傲かに曙光に接して、心靈めざめて従來の自己を返照する時は、実に我痴我慢の自分勝手の甚だしき自ら慚恥に耐へぬ感がある。未だ微光に接せざる程は、煩惱我が自己の闇と汚れと罪と悩とである事を自覚出来ぬ故に、靈我が喚起し心靈我が覚醒してからは、我煩惱の深重なる事が認めらるゝに至るから、大に奮発して靈体现前せんととの熱誠あり、然れ共是自己の能くする所ではない。日光を仰ぐに非ざれば、闇黒は明けがたく、強く如来に接触せんと願望は、益々煩惱我の業障深重なる事が感ぜざるを得ぬ。煩惱我が変じて聖我に更生せざれば、永遠に浮ぶ瀬なき事を想へば、益慈悲の親が恋しくなる。之が感情の信仰で如来を愛慕の念が切々たるのである。如来と共に在り離れざる身となるに非ざれば眞の安心は出来ぬ。如来と不可離の關係を心靈の花開ける後に得らる。心靈の花は七覺の枝に咲き匂ふ。

## 七 覺 支

信しんと念ねんとの五根ごこんを以もつて修養しゅうやうの功こうとして、信心しんじん喚起くわんきしたる心靈しんれいは、五根ごこんに養やしなはれて益ます々ます發達はつたつして、心靈しんれいの樹きが增長ぞうちやうし枝葉しえふ益ます繁茂はんもして、愈々いよく心靈しんれいの花はなが開ひらくべし。七覺かくは信心しんじん開發かいはつする心こころの作用さようである。

(一) 扱法ちやくほふ覺支かくしとは已すでに信心しんじんが喚起くわんきされて、如來にょらいを我われが有もとせん我如來われにょらいの有もとならん我如來にょらいの中なかに入いらんとする。然しかれども自己じこの胸中きやうちゆうには種々しゆくの妄想まうざう煩惱ぼんのうが雜起ざつぎし聖如來せいにょらいの中なかに在ある心こころは甚はなはだ捕捉ほそくし難がたし、故ゆゑに如來にょらいを眞實しんじつに信しんじ愛あいする。初はじめは扱法ちやくほふして如來にょらいの中なかに佗たの妄想まうざう煩惱ぼんのうの爲ために捕とらはれぬ様やうに意いを用もちひねばならぬ。若もし妄想まうざう邪念じやねん起おこる時ときは力つとめて夫それを捨すて専もつば如來にょらいに專注せんちゆうす。

(二) 精進しやうじん 若もし如來にょらいの光明くわうみやうの中なかには一切さいの靈れい、眞善美しんぜんびとして悉ことごとく所有しやういゆうせぬはない。故ゆゑに我われを捨すて如來にょらいを取とり、勇猛ゆうみやう精進しやうじんし、靈れいは如來にょらいの子こであるけれども、魔まの眷屬けんぞくたる

煩惱我が跋扈して、如来と我との共に在ることを妨ぐ。そこで自己の罪惡を自覚するに随つて、業障懺悔の苦悶が深く感ぜらるゝ。刻苦奮励は恰も鉱垢から純金を煉り出す如く、靈性の實現に力むるのである。

如来の靈相彷彿として在るが如く亡きが如くに感じらるゝ。信念強ければ魔の障も随つて強い。未だ毫も信心開發に心力を用ひざるものには、業相もまた感ずる筈がない。

種々の業相現前するも敢て意に介せず、靈性現前に突進す。若し我如来靈相を得るに非ざれば寧ろ死すとも動かじと一心金剛の如くならば何ぞ成功せざらん。例へば学業技芸等も熱誠に精練する時は必ず成熟すべきが如くに靈性發揮に熱注せば必ず成就す。之を精進覺支とす。

(三)喜。喜とは三昧定中の前駆として現はるゝ心的現象にて三昧愈深く心念益微にして、靈妙なる定中の喜樂を感ず。此の甚深なる定の歡喜は未だ禅味を實驗せぬ人

には想像も出来ぬ。

(四) 輕安。定中の喜樂を覺へ、弥々純熟するに随ひて、融明にして不可思議、身心も如來の中に溶け込みて、苦樂の束縛から脱け出で、我が亡じた処に、無限の愛と喜に充されて、而して無限に抱かれて之と融合した処に身心の輕安を感じる。

(五) 定。身心共に大我に融合して、身心共に亡じたる如くなれ共、其すべてが絶対に没却してしまつたのでなく、靈我を通して無限の道光に接するのである。神氣清朗にして片雲なく、麗日天に赫き照すこと極まりなく、神秘の靈感、仏我に入り我仏に入りて、八面玲瓏として、内容の歓喜言ふ可からず。如來の愛に充され喜に充ち、三昧中に全く大愛に充滿され、全部が如來に抱擁され、歡天喜地、是三昧正に發揮したる状態である。

(六) 捨。已に全く大我の中に自己の全部を摂められて、自己の心と大靈と合してよりは、必ずしも意志の集中を要せず、任運自然に如來と離れず、已に常恒任運に三昧中

に在りて、如来心の外に我無きに至る。初めには靈悦は失ひ易し、細心の注意を要す已に純熟久しければ、無意識的にして仏と共たり。之を捨と云ふ。

(七)念。念とは已に如来心中の自我なれば、如来の泉源より流れ出づる我心念である故に、仏心即自心、自心即仏心、念々仏心と相応す。否仏心が自己の心を通じて発す。

## 更生

心の更生。宗教上の一大事は此心機一転の更生する所にあり。即ち従来の煩惱我、即ち無智の我、肉の我が全精神を支配したりしも、天性と理性との我が精神を支配せし無明の生活生死の生活が神秘靈感三昧中に従来肉我に死して無明が覺醒して靈我が顕現し、即ち光明中に生れ更りし、此真我顕現が宗教の大事なる関門なり。禪の大死一番して見性したる時、基督教の聖靈に感じて靈に復活したる時なり。今は靈性開發して聖子に更生し光明生活に入りし時なり。之を開發の位とす。

## 啓示の三種

## 一、感覺的

仏智見開示せらるゝ所觀の表象は、大乘仏教の如くの三昧の觀相に豊饒なる宗教に  
 は、啓示の表明なる即ち所觀の境相甚だ多し、挙るに違あらず。今三種の表相を明  
 さば、

宗教的客体との関涉に、即ち三昧の中に先驅として、意識に発現し来るものは感覺  
 態なり。感覺といふも主觀的なる言を俟たず。

導師觀經疏に、三昧の中にありて、五大皆空にして、唯識大のみあつて、湛然とし  
 て凝住す。猶し円鏡の如し、内外明照にして、朗然清淨なりと。此の想を作すとき、  
 乱想除くことを得て、心漸く凝然として、後除々として、心を転じて、諦かに日を  
 觀ずれば、其利根なるものは一坐にして即ち明相現前することを見ん。境の現ずる時

に當りて、或は錢の大的如く、或は鏡の面の大的如く、此明の上に自ら業障輕重の相を見ん。

行者若し彼境の光明を識らざれば、此日輪の光明の相を看て、常に此解を作さば、久しからざる間に、即ち定心を得て、彼の浄土の事の快樂莊嚴を見ん。

又行者、初め定中に在つて此日を見る時、即ち三昧を得、定案を得て、身心内外融液にして不可思議なり。

觀經に宝地觀を説きて、瑠璃地の内外映徹せる下に、金剛の七宝金幢ありて、瑠璃地を撃ぐ等、此想成ずる時一々觀じて了々に開目閉目に散失せざれ。若し三昧を得れば彼國地を見ること、了々分明にして具さに説く可からず。

觀經の日想と水想とは仮觀また方便觀とす。日と水との經驗材料に凝神し、其の写象を反映して成就する時は、念に随ひ意思に随て顕現す。

瑠璃宝地と宝樹觀、宝地觀、総觀は、依報莊嚴と名づけ、此を觀ぜんには、若は聖

經きやうにより、或あるは曼荼羅まんだら交相かうさうの表相へうしやうを印象いんしやうし記憶きおくし、自己じこに印象いんしやうしたる表相へうしやうを投射とうえいして專想せんさう凝神ぎやうしんし、而しかして思惟しゆいの中なかに、思想しきやうし憶念おくねんして、覺想かくさうあらば、彼の相かを見るみも想心さうしん中見ちゆうけんと為なす。思惟しゆいの位くらいなり。益々ます進化しんくわ發達はつたつして、覺相かくさう( )止しし、唯定心たひぢやうしんのみあつて前境ぜんぎやうと合がつするを正受しやうじゆと為なすと。

次に閉目開目へいもくかいもくに三尊さんそんの宝像ほうざう、極樂界中ごくらくかいちゆうに徧滿へんまんすと觀くわんじ、心眼しんげん開ひらくことを得えば、了々りやうりやう分明ぶんめいに極樂國ごくらくこくの七宝莊嚴しちほうしやうごん及および仏菩薩ぶつぼさつの形像ぎやうざうより光明くわうみやうを放はなつ、又水流光明またすゐるくわうみやう及および化鳥けちやう皆妙法みなめうほふを説とくを聞きく。出定しゆつぢやう入定にふぢやう恒つねに妙法めうほふを聞きく。出定しゆつぢやうの時憶持ときおくぢして忘れわすれざれと。

導師だうし曰いはく、然しかるに十三觀くわんの中なかに、宝地ほうぢ宝華ほうげ金像こんざう等の觀最くわんもつとも要えうたり。若もし人ひとに教せしへんと欲ほつせば、但此法たゞこのほふを教せしへよ。但此たゞこの一法ほふじやう成じやうぜん者ものは、余觀よくわんは自然じねんに了りやうするなり。

諸宝林樹しよほうりんじゆ皆みな彌陀無漏心だむろしんの中なかより流出しゆつぷつ仏心ぶつしん是無漏しんこれむろなるが故ゆゑに其樹そのじゆも亦是無漏またこれむろなり。

又真身觀またしんじんくわんの阿彌陀あみだ佛身ぶつしんは真金色しんこんじきにして相好光明さうがうくわうみやう明照めうしやう十方世界ぼうせかい、仏相好光明ほとけさうがうくわうみやう、眉間みけん白毫びやくがうみぎ右みぎに旋めくつて須彌山しゆみせんの如ごとく、仏眼ぶつげんは四大海水だいさいすいの如ごとく、青白しやうびやく分明ぶんめいなり。身みの諸もろの毛もう

孔より光明を演出すること須弥山の如し。

阿弥陀仏には八万四千の相好光明普く十方法界を照して、念仏の衆生を攝取して、捨て給はずと。阿弥陀仏を見上れば即ち十方無量の諸仏を見る。

次に観音勢至二大士の観

次に自身浄土蓮華化生、花開く時、五百色の光来つて身を照すと思ふ。次に一丈六の像、池水の上に在るを觀ず、又阿弥陀仏身量無辺凡夫心力の及ぶ所に非ず。如来宿願力の故に、憶想すれば必ず成就を得。阿弥陀仏神通如意、於十方国、變現自在、或現二大身一満二虚空中、或現小身、丈六八尺、所現の形皆真金色なりと。

是等は客体の妙色莊嚴を表明する感覺の啓示にして、已に又感覺の妙相を知見せらるれば、是よりは進みて、斯の如きの妙色莊嚴を表明せる客体の内容には、最上無比の内容、無上の智慧、無限の恩寵等なかるべからず。如何に其内容を觀し上るべき。

## 二、写象的啓示

仏知見の啓示として、妙相莊嚴、暉暉煥爛なる感覺的眞觀より進みて、客体の内容を觀ぜんとすれば、写象的ならざるべからず。

觀經には、初めに、依報莊嚴を觀じ、第九に至つて、正報妙相好を觀じたるは、写象、即ち、阿弥の内容の無上智恩龍等を觀ぜしめんが方便なり。

宗教意識の客体に対して、専心に憧憬するは、即ち客体の内容にあり。即ち無限の恩龍によりて、摂護せらるゝの愛念より、宗教衝動の内容憧憬として、客体に關係を結ばんと欲するなり。然れども内容を恋念せば感覺的表明なる妙色相好を觀ぜんとするは是れ自然の理なり。而して妙色相好を觀する後は其無上の愛と内容を觀ぜんとするも、又理の然らしむる所なり。故に觀經は、初めに依報より正報に進み、正しく眞身觀には、阿弥陀仏の相好光明普く十方法界を照したまふことを觀ぜしめ、斯の

如くに觀ぜしめたる所以は、無限の愛を表明したるに外ならず。この相好には自ら内容恩寵を表したり。無限の内容は言語說話を以て、其真意味は表すこと能はず。

念仏衆生攝取不捨の、衆生の心機と客体の内容との關係を啓示の内容とし、攝取不捨の語を以て表したり。これに無限の意義を有せり。

導師この意義を釈して、衆生行を起して口常に仏を稱すれば、仏即ち之を聞き給ふ。身常に仏を尊敬すれば、仏即ち之を見給ふ。衆生仏を憶念すれば、仏亦衆生を憶念したまふ。彼此の三業相捨離せず。故に親縁と名づく。

聖阿闍師曰く、觀行の人は仏を觀ずるも客体と主体とは彼此相待して觀見す。念仏の行者は無限の慈悲心中に在りて常に安住すと。

此の意は、実は此彼相待して感見するは、感覺的啓示にして、無限の智慧の中に常に攝取せらるゝを意識すれば、是写象的啓示に接したるなり。彼此相待して觀見する主觀的なれば同一理性の發現に外ならず、然れども写象の内容たる無限の愛を示さる

は深密なり。また仏身を觀するを以て亦仏心を見る。仏心とは大慈悲是也。無縁の慈を以て諸の衆生を攝したまふ。慈悲の恩容に接するときは自ら無限の大慈悲たることを感ず。

無縁の慈は、一切衆生もと、阿弥絶待真心の衆生及び一切の世界なれば、阿弥は無縁の恩寵常に尽十方無尽の法界に充塞して、常に一切を開展して靈化す。一たびこの恩寵を感じたる時は、時として処として啓示に接せざるなき觀念を遂げん。

次に写象啓示として經に示されたるは、大經の下に、若し衆生ありて、明かに仏智不思議智、不可稱智、大乘広智、大乗広智、無等無倫最上勝智を了する故に、七宝華中に自然化生すとは、是なり。諸智を明に了すとは唯知解に非ず、若し知解ならば誰人か解了せざらん。此智即ち一切智は、本法界に周遍して、衆生の心機に關係し、心機を開展して、阿弥の中に攝取するところの性能なり。信仰の中に此の理性に個人は開發せらるゝが故に、自然と絶対の阿弥の聖意に契合して攝取せらるゝが故に、全く深く心開展

して、自己全く阿弥の一切智慧態の個人たることを明かに信ずるに至るものは、此勝  
智態に致一したるものなり。解了と真理とは同じからず。たとい解了としては五智の  
義を理解せざる者にしても、自然に信開展し、阿弥の内容と致一し、其の内容を若し  
解剖せば、全然自然智と契合せるものあり、文字に執する人の得て窺ふべき処にあら  
ず。

写象の啓示としては、或は仏の四智十力等を観じて成ずるときは皆これなり。今は  
阿弥の宗教客体を表明する処の屬性をもて、全慧全能と神聖と正義と恩寵となり。阿  
弥の觀念には、神聖体にして無上の權威を以て主体の内面に嚴臨し、真理の光とし自  
己の良心を発現して神聖侵すべからず。神の命令とし無規定に道德態。

また正義としては、仏知見の、義務として正道に活動すべき光をもたらし、恩寵と  
しては罪惡に没びたる中より解脱して、無上なる無限の中に致一し靈化する処の理を  
示し給へり。

この屬性はもと絶対無限の個人現として含蓄的に啓示せられしが故に、もと絶対なれば個人現は意識の進むに随つて益々明了に知見することを得べし。

### 三、観念的真心観

三昧耶の中に直観を超えて、又写象を超えて、次に観すべきは、理想態即ち法身観なり。観念的法身観は、絶対真心の本体に対する観念にして、絶対写象の観念に感覺性を排除し、概念を清浄にして一切を集中統一態にすれば斯観念なり。

絶対観念は総括具象的にして、感覺ならず、空的写象の如く、統一的にしては一の理想なり。

絶対真心に對する観念にして、他の感覺的及一切の心念を超越したる不識精神態にして、華嚴の泯絶無寄観、絶対観念の、一切の省慮等を超えて廻絶無寄、般若現前、言語道断、心行処滅知を以て知るべからず唯証のみあつて相応す。心境冥合、冥心は智

を遣り、方に茲に詣つて境明かに、唯証のみ致一すべし。知解の境に非ず。冥合するは眞証。証即境、意識生ずれば本質に乖き、正念を失ふ。

眞実理性。本自如然、識亡智泯、是本眞。

此冥想的絶対真心態理想は是客体の本体の表明に對する觀念なり。

初め、感覺的の啓示によりて初めて客体と關係致一たることを証明し、感覺的なるは客体の表面を表象し、次に進で客体の内面を省慮的に觀念し、神聖正義恩寵等の神的内容知見を与へられ、次に斯の如きの客体の本体眞身觀に凝神し、絶対写象の感覺態と及び省慮等を除き、純粹理性態に智尽き意思断尽する処、即ち絶対真心即ち客体の本体なり。

かく觀念するを順觀とす。

之を逆に觀ずれば、先づ清淨法身即ち冥想觀の実体より次に屬性たる一切能一切智

の神聖正義恩寵等の属性をもて莊嚴し、至真至善至美真理の最勝たる神的写象を觀じ、次に客体の感覺的に表明したる無尽の相好光明眞金色にして円光徹照し端正無比なる無上の威神と光明とをもて智慧と恩寵とを表象し給ふを觀ず。

## 無 生 忍

正知見を開展して仏の實在を証明し悟入すべき形式は先づ三種とす。

一、感覺的に淨土の莊嚴相好光明等依正二報莊嚴等。二、抽象にして仏の四智力等。是仏の属性を觀念的に悟入す。三、理想にして仏の本体即ち法身を觀念す。

是三昧發得して仏の實在を証明する時、尚其本質實體を究むる時は廓然として無生法忍を悟ることを得べし。

觀經に韋提希五百の侍女と共に仏の所説を聞き時に應じて即ち極樂世界の広大な相を見る。仏身及び二菩薩を見ることを得て心に歡喜を生じて未曾有なりと歎じて廓

然として大悟して無生忍を得と。

無生忍とは自己の心性と絶対なる理性と同一の理なることを観念的に証明し忍識せるなり。自己の心性と絶対理性とは本より同一の理性なれども唯心象の妄想分別の翳塵によりて之を自己の心性なりと認めて其根底なる心理に到達すること能はず。自己心理の根底に觀念し工夫して絶対理想に凝神し、妄想妄観、悉く排除し、其極度に到りて洞然として一如の深底に到れば此の心理に自我の浪なく湛然たる大海の如し自我の妄塵なく、蕩々たる心象は念々に生滅し、甲の念滅すれば乙の念生じ、前塵と共に起滅して止むことなし。蕩然たる理性は寂靜にして常に同如。前念の滅に非ず後念の生に非ず。

衆生本無生を悟り、衆生は是れ衆理の聚る処、法のみありて実の衆生なし。法もと無生の理を覺るとき無生滅忍と名づく。深く此理をさとり、心性常自寂滅にして、靈明虚徹して、理十方に円照し、三際を徹するは是れ阿弥陀の体が人の心理に啓示と

して知見したる弥陀の体なり。心性常寂なるは無量寿、寂にして常に照すは是れ無量光、故に弥陀の理性を知見せらるゝとき寂滅忍を得るなり。

問。無生忍、寂滅忍等とは法身菩薩の証入すべき所にして凡夫の境界に非るべし。如何に現身に之を証明する。答て。若し因果の上に彼の報土に入りて而して後とまた現在との区別を異にして、論には、現身にては観念的に無生法忍寂滅忍を証入し、この習慣が性となりて後には生得的實在的に此の機制の依身を脱却する時は實在的に大滅度無為涅槃を實現し来るべし。

此無生寂滅忍なるも人に苟も人格を有せる完全なる精神を有せるものにして之が形式備はらざるものなかるべし。然れども意志を注ぎ精を研ぎ神を凝して實現することとに耐えざるのみ。況んや生存競争の過激なる現時の如き物質的文明の潮流に際しては、とても神人合一理性意志をして理性の即ち智慧光に朝する如きは甚だ遠し。然れども斯の如きの価値は何時代たりと雖も失ふべきものに非ず。

## 開 発 位

すでに知見啓示によりて客体を証明するも、自己天然の主我及び天然の情操を転依し  
て全く阿弥の中に安住せざれば未だ解脱と云ふ可からず。

消極の解脱。人は天然なる煩惱潜在して此の衝動より悪業を現行す。この煩惱の  
所在を認識せざるべからず。楞嚴に、阿難よ、汝胸中の賊の所在を識認せよ。汝誤  
ちて賊を認めて子と謂へり。為に自ら解脱すること能はずと。又遺經に、煩惱の毒蛇  
睡て汝が胸にあり。当に屏除すべしと。天性として潜在せるを種子となす。是天然規  
定の主我なり。二に現行とは種子が縁に随ひ時に応じて現実に行動する処の要素なり。  
人には理性ありて之を制御すべき使命を有せる意志は之を制御すべきことを怠るが為  
に現行す。この現行に就いては意志は怠慢の罪あり。このうち種子は主我根本悪にし  
て次は怠惰の罪なり。

意志は理性に背きて許容罪は不注意によりて、おもはずも現行を作るに至る。人は自己天性の悪には責任を感じず。この主我悪即ち種子の賊の潜在する処を認識せざるべからず。

人の三業の悪の現行あるは、一々の現行其のもののみならば、之を除くこと容易ならんも、其根本に種子即ち主我悪の賊あり、之を知つて之を処分するに非ざるよりはいかでか現行の源を断たん。

自由意志あり。人は罪業の後には他の方へ行ひしをと欲するに至る事實は、此の顯なるを以て、良心の責に苦悶せざるを得ず。この苦悶の感動は脱却し転依すべき動機となる。こゝに於て、如何にせば之を脱却せん。人は菩提即ち道德秩序を損したるを感じば、いかなる苦をも忍びて償はざるを得ざるを感じ、後に良心の制裁に服すべし。

すべての煩惱が現行によりて一々皆この現行あるは、其自己良心の道德律と衝突す

るが故に感ず。自己の良心は即ち本仏性。阿弥の分身として自己に含蓄せる大( )  
提の個にして、罪業は主我なるものと共に含蓄せる善と悪との衝突にあらずや。

罪悪は阿弥と反せるが故に、阿弥と融和せんには、之の罪悪を苦悶し、過去を悔ひ  
将来を慮る。

罪過感情の益々深きに随つて、解脱を求むる情は又深くなり、罪悪の改革のために  
悔うるはよし。唯既往を悔うのみにして苦しむも、自克により脱却の爲めに改革のた  
めにあらざれば益なし。若し此の感情を脱却するにあらざれば、融合の状態にすむ  
こと能はず、罪過解脱の要は阿弥真我に安住せんが爲めなり。

現行の罪悪に苦悶せらるゝも、其の原動たる賊の所在を認識するも、これを滅殺す  
るに非ざれば、安穩なる能はず。睡蛇出でば当に安眠すべし。未だ出でざるに眠るは  
是れ無慚の人なりと。

この煩惱を退治する心機は、之を認識する知力にもあらず、また之を苦悶する感情にもあらず、理性によりて煩惱に反応する意志にあり。

道德の増進するに随つて煩惱に対する意志の動力発達して、罪惡を漸々に減ず。

此の煩惱は根本惡の天性なる意志の性能にあり。煩惱に対する反情は本能感情的感動の性を有する惡を嫌忌す。

天然の根本惡を脱し、尚根元の自我は、所謂任運にして、末那の態といふべきものにして、俱生の惑とて、天然規定の法規にして、これをも滅殺の要を感ず。自我欲の罪過感情により、意志理性態は之を煩惱を滅殺せんとする自克によつて改善す。

之を脱せんとするも天性自ら度脱の能はざるを感じ、自己の煩惱を嫌忌するも退治の力なく、苦悶極まつて感情の最高頂に抗り、煩惱の過患を認識し、之を感じ意志はこの情操を転化せざるべからず。轉換が消極の方面にして、其の中に積極の道心に化すべき恩寵による。

転換

積尊しやくそんの当まさに正覚しやうがくを成じやうせんと欲ほつするに先さきだつて、十魔じゆまの障礙しやうげを被かうりたるは、この所ところの消息せうそくならん。

積尊しやくそん、伽耶がやの道場だうぢやうに於おて一心しんに金剛石上こんがうせきじやうに座ざして、当まさに煩惱ぼんのうを断だんじて正覚しやうがくを成じやうせんとするに先さきだつて、即すなはち精神せいしんの大光明だいくわうみやうを奮ふるつて自己心内じこしんないの煩惱ぼんのう魔まをして、汝なんぢを降伏かうふくするに非あらざるよりは、無上むじやうの道意だうい、即すなはち真しんの道德情操だうとくじやうさうを立たつ能あたはずとの、理性りせいの声こゑに、忽たちち主我しゆがの魔王まわうは魔まの属性ぞくせいを率ひきゐて、交こもも動乱どうらんして道情だうじやうを（）れ乱みださんとす。内容ないように顕出けんしゆつする愛欲あいよくの魔女まぢよは種々しゆくく幾多いくたの妖姿やうしと巧言かうげんとをもて佞性べいじやうの意志いしを媚惑びわくす。順情じゆんじやうの魔女まぢよを却しりぞければまた同時どうじに異方面いほうめんの違情ぬじやうの瞋怒しんぬ等及とうおよび一切さいの魔まの属性ぞくせいは醜穢しうゑにして見るべからず。人ひとを害がいすべきの煩惱魔ぼんのうまにて交こもも胸裏きやうりに紛擾ふんじやうして道意だういを侵害しんがいす。若もしこれを滅殺めつさつするに制せいするに智力ちりよくを以もつてす。斯かくの如ごとく数多あまたの魔属まぞくあるも巨魁きよくわいたる主我王しゆがわうを滅殺めつさつするにあらざるよりは、争いかでか彼らかれを降伏かうふくすらんと。智力ちりよくはかの賊首ぞくしゆの主我しゆがを識

り感情の苦悶は毒箭胸中に粉擾して、道意の意志之を転換せんとして、魔賊いかに奮戦すとも、終に自我を滅殺して、微妙の法を得て、最善を成ず。良心苦悶の魔も伏して初めて醒覚して、消極に天然の自我の命終り、永く三界の苦輪を脱し、転依の積極の方面は即ち微妙の法を得て、正覚を成ず。

道心転依の積極方面

恩寵即ち微妙の法があかねさす暎にしてこゝろ覚醒し、朗然として無明の夢醒めて、仏知見啓示して、従前の自我滅殺して、精神一転し来れば、是絶対無限の寿の中なる自己にして即ち阿弥の智に心を投じ、情操一変して、転化すれば、即ち阿弥の中の個人なりと醒覚し来つて、観ずれば、自我は即ち真我の外にあるなし。煩惱の性即ち菩提なり。この情操を離れて外に無上道心なし。

唯従前の世俗野卑の情操を転じて、神的道情と化し、諸の煩惱悉く是菩提ならざるなし。是菩提を誤用して、自ら煩惱とし、即ち賊を認めて子とす。情操転換すれ

ば更生なり。更生とは情操転化して阿弥の中の生命として生々活動するなり。

## 体現の位

智慧の日月の照す下　光の中に生活す身は

聖意を己が意とし　三業四威儀につとむなり

己に信心開発し靈我に更生したる後は即ち仏子である。

如来と共に在り、如来の中に我あり、絶対無限の如来は個性なる我に依て現はる。

仏子なる我は天地万物を脚下に踏へて、高く宇宙の無限も此個体の中に溶け込んで居る。此自己は絶対の大海に根底を隠して尖頭を水上に現はして居る巖である。若し此個性が無くなるとすれば宇宙万物は悉く己に於て価値が滅して仕舞ふ。

仏子たる我は一方には作仏度生の二心ありて、一方には如来の智慧と慈悲との光明中に仏子の願望たる円満なる靈我を充実せんが為めに、益々向上的に一歩／＼に新な

る土地を開拓して、仏に成らんと進行すべきである。

即ち開発は我如来の子として父の全き如くに全からんことを願望し、一切菩薩の万行を以て、仏子の靈格を莊嚴す。

## 心靈生活の衣食住——衣

例へば此の身体の生活にも衣食住を要する如く、靈の生活にも靈の衣食住が必要である。

心靈に如来の賜なる応法妙服を着る。応法妙服とは自己の如法なる道德秩序の正しき生活を云ふ。俗に云はゞ常識に應ふやうな生活である。人格を莊嚴する処の品位を完全に為なくてはならぬ。恭儉以て己を持し仁讓以て佗に待す。先王の法服に非れば敢て服せずと云ふごとく、法に如ふ行為を以て（ ）また經に應法の妙服が自然に身に在りてふは、信心誠に得る時は、自然に人格が具備して道德秩序の正しさが自ら身

に備つて來ることである。

衣に慚恥衣と云ふは心光身を照して己が行為を返照すること、神聖なる光明の中に廉恥の服を身につけてあれば破廉恥の行為は自と慎み、如来照鑑の前に常に屋漏に恥づと云ふやうな慚が身に備はるのを慚恥の服と云ふ。また柔和忍辱の衣とは慈悲の光に触るれば身意柔和となりて苟且に怒らず他人より罵詈謗恣を被むるも忍辱の衣厚ければ快く忍耐が出来る。經に「縦令骨節支解せられても、甘露を飲むが如くに悦べよ」と。

### 食

食は靈の糧。身体に滋養に富む物を摂取する如くに靈にも滋養分を要す。朝夕の禮拜讚唱の中もまた三昧にして、若しは瞑想中に三昧の妙味を感じ、また常に念に随つて法喜ありて、内心の靈感極りなく覺へらるゝが故に、自ら神魂を潤ひ、身心輕安、歡喜究りなきに至る。また「仏法の味を愛樂し、禪三昧を食とす」とは此靈の食であ

る。また仏陀は一餐の力を以て無量劫飢えず衰へず姿色も清らかに光顔も異なることがない。此妙味は法悦と云ふ靈の妙味を味ひし人にして始めて語るべきある。

## 住

心靈の安住する所即ち平生心の安んずべき所、この身体も住家なきは乞食非人の如くである。又縦令身は金殿玉楼に住すとも精神に安住所なきものは靈の非人である。共に天を語るべき資格はない。靈は云何なる所に住すべきであるかとなれば、吾人は常に如来と共に大光明中無比莊嚴の心殿に住している。慈悲の懷に安住して居る。若し心靈の常恒安住する心殿を見ることを得ば、また大悲の堂と云ふも自己が如来大悲の室に安住して居る時は、自己もまた慈悲化して佗に対して同体大悲の同情心に富んで来る。心靈如来大我の中に安住するが故に娑婆の種々八風のために動揺せられぬ。人は衣食住を全うして礼節も成る。心靈の衣食住にしてまだ完全せざる者にして道徳行為が出来る筈は無い。心靈の衣食住は如来と共に在ることを得れば自ら具備する

に至る。

## 聖意を己が意志とす（人生は向上の一路）

人生の価値は大なるものと聯絡したる心意が終身その力を尽して努力する処に価値あり。己に如來の中に安住し心靈生活に衣食住を要するものは働く為めである。

聖意とは神聖正義恩寵の三徳を云ふ。如來の神聖は即ち行為を鑑照し給ふ智慧である。如來は世の道德秩序の光明である。如來は一切衆生を有終の全きに標準して神聖の智光普く衆生の道德界を照し給ふことは、恰も太陽が外界を照すが如くである。若し太陽の光微りせば世は闇黒である。衆生の道德界に神聖の光明微りせば道德秩序は闇黒である。神聖の智は吾人の心地には正知見の心にて、真理の標準に稱ふ正中の意志と現はれて自己の道德行為を指導する光となる。即ち如來から自己に現する意志である。最高理想の道德意志である。それが即ち正知見と云ふ最高等なる良心である。

其神聖は真理であるから侵すことが出来ぬ。其の正知見から出づる行為が即ち正義である。邪と悪とを捨て、正と善とに向つて努力することである。

如来の本願、捨悪択善と云ふは正義のことである。

正義に八正道あり。是聖意に称ふ行為である。光明行為の標準である。八正道とは正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定を云ふ。

神聖なる正見が意志の光から思惟することは正しい。人正見の光欠くれば邪の思考が頭脳中に浮び、思想が正しければ其を外に発表する言語も虚偽悪口両舌等なく、真面目に正直に出づる。また身に於て行ふ所も正善となる。殺生、偷盜、邪淫等を始めすべて不正の行為を遠けて正善を行ふ。正命とは生活の意である。人の生命は縦令詐偽偷盜等によりて得た食物にても養分さへ取れば肉体は養はる。併し斯の如きは不正なる生命である。渴しても盗泉の水を飲まず、正しき生活をなす之聖き生命である。正精進とは勇猛精進に努力すべき事、之正善でなくてはならぬ。仮令昼夜二六時中身

心を苦勵して頭燃を救ふが如くなるも聖意に称ふ行為でなくてはならぬ。正念とは内的に活動するは念である。所謂八億四千の念が若し聖意より自己の心に衝動する時は念として仏ならざるはなし。古人云はく、一念弥陀に在れば一念の仏、念々弥陀なれば念々の仏と。内に仏の念を以て活動する時は、外に向つてまた仏行を為す。正定は一心に聖意が全く自己の意志と成て動ぜざるを正定と云ふ。此八正道は神聖正義を体して身口意の三業に現はす道業である。

恩龍 前の神聖正義の聖意が衆生の心意として実現するに至るは已に信の成熟したる上に於て能くす。譬へば小児は成人の後に全き業務に堪へ得らるゝ如くに、仏子たる心靈が成長して後、聖意を現はすつとめが出来る。人の此の心意を増長せしむるは如来の恩龍である。恩龍は母が子を養育する如き作用にて、如来大慈愛の光は人の靈性を増長せしむ。前の靈性の衣食住の例の如きは悉く如来恩龍の加はる所に於て行はる。

## 聖意を現はす行為

聖意を体现するは光明の行為である。聖典に、聖きに生れ更りたる聖徒等は、其講説する所あれば聖き思想の發表をして常に正しきを宜ふ。是己の心正しければなり。正しき智慧の明から出づる言は、道に契ふて違ふこと又過失ることなく、衣食住等の凡ての物に我有の心なく、染着の心なく、去るも来るも進むも止るも情に繋がるなく、自由意志が最もよく發達してをれば、之を適し彼は莫すと云ふなく、いかなる境遇にも自ら満足を感じず。

公平無私にして彼と我との私の凶なければ、他と競争することも又他人の非を説くこともなく、諸の階級の人に対して彼を見ること己の如く怒り、同体慈愛を以て凡てを饒益せんと想へり。人格円満に調練、温良、柔軟に、己に調伏しあれば、仮令他より罵詈譏誘せらるゝも、怒り又恨むなどの心なく、仏の心を以て己が心とす。

能く身と心とを調へて清き時は、其為す事に厭ひまた怠る心出でず。公明正大と高尚なる理想と深遠なる情操と能く統一せる意志と、また真理を愛し真理を樂ひ真理を喜ぶの心のみなり。すべての弱点から清められ悪趣の心を離れたり。一切の聖き人の行ふべきを究めて無量の功と徳とを具へ成就せり。心常に深く禪那と神通と妙慧とを以て志を七覺に遊ばしめ、自ら覺しました他を覺せしむ。

肉眼清徹に分明なるが故に、常識に富みて己を恕りて他に待す。天眼通達して無限の故に、能く天心にかなふ。法眼を以て道德の真理を究め、慧眼が真理を見て終局に達す。仏眼具はりて真理の底を極め、聖意より我に通じて聖意をすべてに示す。等しく此三界は空また実には無所有と觀じて、而して愈々仏法を求め、諸の如來の道を自ら徹底して衆生の煩惱の患を除滅す。

真に私なく、神の聖意より出づる言葉は泉の如く、衆生の煩惱の炎を滅す。如來の真理を我心とするが故に真理の如々を解ることが得らる。

善く煩惱と習氣とを滅するの方を知る者は、世の戲論を欣はず、正しき論のみを棄ふ。諸の道德の本は己が意を清むるに在る事、志仏道を崇む。一切の法の本源は煩惱を寂め、迷雲を滅すれば真如の月頭はるゝ。其聖く澄める心には悩と慾は俱に尽せり。

自ら真理を究むる者はいかに甚深第一義を聞くも敢て心に疑と懼とを抱かず却つて能く修行して之に達せんと志す。慈愛の心深遠にしてすべての人を覆ひ、慈愛の心の大なること天の覆ふ如く衆の苦悩に同情して地の物を載する如くに、一切は如来の子なれば一切と共に父の許に至らんと。我等が疑の網を決くは如来の慧より出づ。真実に疑の網を決断せんは自己の慧より出づ、他人より教を受けるは知識を得るのみ。自ら慧の光が現はるれば仏の教法を該羅して遺すことなし。

智慧の広く且つ深きこと大海の如く、一心の三昧に心の揺ざること山王の如し。慧光明るきは日月に超えたり日月は外界を照せるも真理を照すこと能はざればなり。聖

められたる靈格具足し円満して志節の清められしこと雪山の如し。大人の量の広きこと大地の淨と穢と好と悪にも平等に異心なき水の如し。淨き水の如くに心の垢染を洗ひきよむ。猶猛き火の一切の煩惱の薪を焼き滅する猶し。また大風の如し、諸の世界を行くに障りなきが故に。また虚空の如くに一切の有に執着なし。蓮華の如く世間の染汚の中に染まず。大なる列車の如くに迷の衆生を運載して安きに出だす。大なる雷の如く震て人の眼を覚ます。大雨の如く甘露の法を雨す、云々。

## (信、住、行、向、地)

仏子、聖意を自己の意とし、三業四儀を以て聖意を現はす。之に三級あり。十行と十金剛と十地となり。

喚起し開發する時は已に十信の満位として如来と自己との合一不離の真理を知見し十住の満位としては感情的に如来の大我と融合して、三密冥合、神秘的の幽邃甚深

不思議の靈応妙感を実験したる上は、常恒大我の中に安住するの心情と為りしは、十住の満位にて、已に従來の罪惡我は転じて聖子たる靈我と生れたり。是より仏子としての実行は行為を以て実現す。如来より獲得したる生命と勢力とは、三業の行為に現はる。

十行即ち行位とは聖意を己が意志と為す道德的行為である。道德と云ふも道德の動機が最高等なる理想即ち如来より我に現はれたる道德の原動力なり。道德の実行には意志の鍛練を要す。此の鍛練即ち如来の靈化である。

十善、八正道、六度等は仏子の三業を道德的に洵治するの機関である。之を自己の力にて洵治するは実に難行道である。若し自覚して覚行円満、菩薩の願行を究竟せざれば成仏出来ぬとすれば、成仏は実に成じ難し。然るに宗教的に如来の恩寵を被むりて仏の聖意に靈育せらるゝ時は、任運に作為する処自ら仏行と為る故に易行道である

十金剛。(十回向)光明に靈化せられたる意志金剛の如く勇猛に自利利他を作す。



## 今日晨朝に仏の救世大慈の父を念ぜよ

仏教の通法として毎朝必ず六念を誦す。六念の中先づ第一に仏の救世大慈の父を祈念せよと教へられてある。仏を念ずれば他の五念は其中に擧りてをる。仏教信者は、今日一日はミオヤの賜たる貴重の時間を空しく費さぬやうに、聖旨に契ふ務めを果すべきやうに深く心に懸くべき為に朝起きて直に此の祈念をなせよとの御示である。先づ朝起きたならば澡浴清浄にしてミオヤの在まさざる処なきが故に今現にこゝに在すことを深く信じ、

恰も朝日の輝く如きのミオヤの威神と慈悲との光明を以て今現に照さるゝ我身たるを信じて真正面に在すミオヤを敬礼し奉り即ち

南無阿弥陀仏の尊き御名を称へてアナタの御力と御恵みに依りて活き働くことを得たる我等は都てを献げて仕奉らむ。願くはアナタの聖旨に契ふ務めを果さるゝや

うに加被力を垂れ給へとの意を以て我は同朋衆と共に祈り上らむ。

此身は全くアナタの者と信じて一日勤むる時は我等が我儘ものも光明の中に敬ふ  
処の念を以て己れを制裁する力となりて聖旨に契ふ務めを為し得らるゝなり。依て朝  
に祈るは、今日一日の慎しみを盟ふためである。

## 仏の救世大慈の父を念ず

大慈悲なるミオヤよ、あなたが法身の徳を以て天地万物の設備にて我等を育くみ給  
ふ所以は更に報身の智慧と慈悲との光明を以て我等衆生の心靈を養ひ之を聖旨に称ふ  
み子の徳を顕はし、現在を通じて永恒の常樂に摂取せんが為なりと信ず。

我等はあなたの本願に順じて至心に信樂してミオヤの光明中に復活せんと欲して慕  
はしき聖名を称へて念じ奉る時は、ミオヤは子を愛し給ふ大慈悲を以て我が心靈を  
育み給ふ。本より罪悪深重の我れがミオヤを至心に信樂して清められたることは全く

恩寵の光に依ればなり。

願ふに世の同胞の中に未だミオヤを信知せざるものは闇き胸の中に諸の悪魔のために襲はれて現在より未来まで闇愴たる獄に墮ちて苦を受け罪を造ること窮まりなし大慈悲の父よ、凭る人々をば殊に憐れを垂れて、光明の中に摂取して靈化し給へ。已に清められたる人々は益々信念増進して大道を進趣するやうに、未だ入信せざる人々は光明を被むりて信芽萌発して清き生命と為りて御子の徳の顕さるゝやうに恩寵を垂れ給へ。

## 仏の救世大慈の父を念ず

大慈悲なるミオヤよ、あなたは光明遍なく十方界を照して念仏の衆生を摂取し給ふ我等衆生の愚蒙なる、ミオヤの聖旨の在す処を知らず自ら闇きに迷ひて苦を受くること極まりなかりし。ミオヤの大慈悲子等を愍み給ひて昔、法蔵菩薩として世に出で

給ひ深重なる慈悲を以て若しも苦海に沈む子等を救はん為にはたとへ身を阿鼻極熱の  
火に焼かるとも寧ろ甘受して忍んで終に悔じとの子を愛する聖意を現し給ひぬ。又近  
くはミオヤの子を慰れむ聖意を示さんが為に釈迦牟尼仏として此の世に出まして世は  
悉く我が有にして其中の衆生は皆是れ我が子と云ひ、凡ての子等が為にミオヤの慈  
悲に便るべき真理を教へ給ふ。即ち昔法蔵菩薩と現れ給ひし時の誓願なり。

十方衆生よ至心にミオヤを信樂して聖意の中に生れんことを望みて聖名を稱へて専  
ら念ずる時は光明中に生るべしとの聖旨を示し給ふ。

我等は深く聖意を信じ、光明中に生れて日々の靈の糧を与へらるゝやうに聖名を稱  
へてミオヤの恩寵を仰ぎ奉つる。

## 釈尊を通じて弥陀を信ず

東の空に昇りて沔かに照らす満月の皎々たるは、西の天に入りて人の目に見えぬ日

光の反映である。

斯の地上に出でまして人類の心の靈を照す釈尊の覺りの光は、即ち西天の淨界に在して、光明遍く十方を照し給し弥陀無量光の反映である。釈尊は人の身を以て斯土に御出ましましたものゝ、御本身は常寂光の都に在ます無量壽尊なので一切衆生の大慈父である。故に宇宙は我が有にて其中の衆生は悉く我子と啓示しなされた。常に絶叫して一切の子等が為に教ふるに、一心に念仏し慈父の光明に触れて靈に復活して現在より永恒の光明に入るべき真理を宣伝し給ふた。

娑婆の舞台に出では釈尊なれども淨界の楽屋に入りて見れば即ち無量壽如来である我等は釈尊の教に随ひ、弥陀の光明に触れ浄められたる人となり、身心共に安らげく歓喜踊躍の日暮しを為し、与へられつゝある靈力を以て聖旨に契ふやう努力し、弥々命終れば釈尊の御跡を慕ふて光明永へに輝く大慈父の御許に帰り、常時常恒の慈恩に報酬し奉らん。

是れ釈尊を通じて弥陀を信じ一切の同胞衆と共に現在より永遠の光明に入らんと欲する所以である。

## 本眞の慈父を恋ひ慕ふ

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声聞けば、生れぬ先の父ぞ恋しき」此の道歌は一休和尚の歌と伝へられてをる。此の意は我等は今、人間に生れ出しも、我が心霊が何れより来りしとも知らず、又死して何れに趣向すべき哉を識らず、闇より闇に彷徨ふ凡夫である。然るに先覚者なる釈尊の教たる經文を閲て初めて、我等は無明を父とし煩惱を母として生を受けたるもの、其先きの迷ひ出でぬ昔の本覚眞如の都に自性天真如来と云ふ眞の父の在ますと聞てより心の奥底に潜める靈が喚起されて連りに天真のミオヤが恋しくなりしと云ふ事である。

読者諸君よ斯の冊誌が即ち鳴かぬ鳥の声である。諸君は久遠劫来御別れ申したる眞

の慈悲のミオヤが恋しくは有らぬか。法華經に一心に仏を見んと欲して身命を惜まざるの心の恋慕するに依て仏は出でて為に説法すと。眞の慈父に値ひ奉らずば成仏は得られぬと云ふことを聞く時は弥々慈悲のミオヤが慕はしくなる。然らば如何にせば信認することを得らるゝとなれば若しくは瞑想到に神を凝らして眞のミオヤに相見せんと欲し、若しは聖名を喚んで觀奉らんと欲して至心不斷なる時は、自己の奥底に潜める靈性が喚起されて微かにも靈光に接することを得ん。若しも焉に至らば弥々ミオヤを恋しく想はざるを得ぬ。実に慕はしき哉、大ミオヤ。

## 一りのミオヤを戴く処の世の同胞衆に告ぐ

我等は人の子であると共に如来のみ子である。人の子であるから一切動物欲の上に我欲を以て有ゆる罪を造る。即ち地獄を造り餓鬼道を造る動物である。日々の己が身と口と意の所作を反省する時は、地獄の火に焼れ餓鬼道の苦を受べき外にゆく道なき

ものである。

然れども其心の奥底に潜める靈性の具はるあり。また大ミオヤの大悲此迷子を慰れむの慈悲心より教主釈迦と現はれ、本地の慈悲を示して曰く、世のすべての子等よ、至心に我を信じ我を愛し我許に生れんと欲して只管我名を喚びて我を頼めよ、必ず光明の中に生れ更らん、との聖意かたじけなし。例へば人の子たる此肉体が生れて初めは母の顔さへ見えぬものなれども、唯啼声を便りに母の乳房を哺められて成長せし如く、仏の子たる我等はミオヤの慈悲の面影さへ見えぬ赤子である。唯ナムアミダ仏の啼く声に如來の慈悲に育まれて靈に活き御子の徳を成長れる終りには必ず仏に成るものと信じて、一ら念仏する時は必ず如來の御育てを被りて、光明の中の人となるを得べし。

仰ぎ願はくば世の同胞衆よ、共にミオヤの慈光を被むり、同胞共に相携へてミオヤの道に向上せんことを祈る。

○

「空海が心のうちに咲く花は弥陀より外に知る人はなし」世に此歌は弘法大師の道詠と伝へられてをる。何人の歌でもよい此道詠の如くに信心の花が開く時はミオヤの弥陀に知らるゝ人と為る。さうなれば此方からも真にミオヤを信じて衷心から弥陀を慕はしく感じらるゝやうになる。宇宙は本より大ミオヤの所有である。総ての生る物は皆其子である。然れども生れたまゝの人は仏の卵である、卵のまゝではミオヤの在ますことを知ることとはできぬ。ミオヤの慈悲の懐にあたゝめられて信心の心が孵化する時初めてミオヤの愛護を被むるやうに為得らるゝ。然らばいかにせばミオヤの慈悲にあたゝめらるやとなれば經にミオヤの慈悲の光は遍ねく十方の世界を照せども念仏するものゝみを撰取して捨てたまはぬと。我ら念仏してミオヤの光にあたゝめられて信心開けて仏の難子と為ることがができる。已にそうなる時はナムアミダ仏と啼く声にミオ

ヤの慈愛おひじはいつまでもうけてをる難ひよこがピヨ／＼と鳴なく音こゑに親鶏おやどりはコツコと呼よびかはすやうになる。かように我等われら信心しんじん開ひらく時ときはミオヤに知しられてをる人ひととなる。卵たまごのまゝでは親おやの愛あいの受うけやうはない。願ねがはくば我同胞わがはらからみなまんの衆とよ。疾とく信心しんじんの心こゝろを聞ききて仏ほとけの難ひよことなりて弥陀みだより外ほかに知しる人ひとはなしと自信じしんの立たつようになつてミオヤを慕したふ子ことしてミオヤの愛護おまもりの下もとに価値ねうちある日ひぐらしを為なすようにならまほしきに御おすゝめ申まうすにぞ。

## 仏とは覚者

仏ほとけとは梵語ぼんごにて訳やくすれば覚者かくしゃと云いふ。眞実しんじつにすべての眞理しんりを諦あきららかに自覚じかくしたる人ひとと云いふことである。眞実しんじつ自己じこを自覚じかくすれば、自己じこの本源ほんげんを知しり得えらる。自己じこと云いふものは本もとがなくてはならぬ。本源ほんげんの自性じしやうを覚さとりたる者ものを覚者かくしゃと名なづく。之これを宗教しうけう的に表あらはす時ときは、眞しんの自己じこの本もとの大ミオヤと云いふことになる。本もとの大ミオヤを先まづ第一だいいちに能よく信知しんちしなくては宗教しうけう心しんは成なりたぬ。私共わたくしどももにやうい、如来わたくしどもの大ミオヤの恩龍おんちゆうに浴よくしなくては有難ありがた

い信仰心ができぬ。然らば何にしてこの世に最も尊き大ミオヤの在ますことが初めて知り得られたのでありしやとなればこの世界には釈迦尊が御出世なされて教へて下されたのでミオヤを信知することができたのである。釈尊も本は実には大ミオヤより身を分けて此の土に出でましたのである。然れども此肉体を受けるにつけては父母がなくてはならぬ。故に父を浄飯王と云ひ母を摩耶夫人と名け、王の家に生れて幼名を悉多太子と申し上げた。国王の位を得て無上の光榮ある御身の上なれども本々一切衆生を救度せんが為の御出世なれば王位を避けて山に入って御修行なされた。而して勤苦六年の御修業の結果、終に師走八日の暁に無上正覚を得たまふたのである。願はくば世の同胞衆よ、範を教祖に取り、御教へを信じて念仏三昧を行じ、自己の本源たる大ミオヤを覚知したまはんことを。



「あみだ仏に染むる心の色に出でば秋の梢の類ならまし」とは、聖法然上人の自から  
弥陀の靈光に薰染して麗はしく美化したる内容の消息を洩し給へる道詠である。頃日  
秋の末到る処野に山に黄に紅に、錦染なす光景を眺むるに就ても、上人の道詠を偲  
ばざるをえぬ。凭は秋の興感と与ふる山野の紅色は、孔夫子の天何と云しことぞ四時  
行はれ百物生ずと曰ひし如く、彼らは天真爛漫に毫も私なく、天の与へ給ふ任に染な  
さるればこそ凭は麗はしき色を為してをる。大ミオヤなる如来は、我ら一切衆生の心  
靈を麗しく染なされんが為に、清淨歡喜智慧不斷の光明を以て永しへに照し給ふも我  
らは其靈光中に在り乍ら、只世の五塵六欲に眼に耳に染汚されて幾年月を経ても、弥  
陀の靈光に淨化せらるゝ光榮をなすこと能はで、来る秋も来る秋も空しく過ごし、再  
び得難き今日を徒らに暮しゆくこと、実に慚愧に耐へざる処、彼らは年毎に有終の美  
を呈して天のミオヤの恩恵に報い奉つるに、清き同胞衆よ我らはいかにぞ受難き人身  
を受むる甲斐として、実に有終の美なる人生を尅果すべきや。自から反省して自己を

照察し給へ。而してまた我らは何にして大ミオヤの大悲に報ふべきぞ。弥陀は靈光赫々として我らが心靈を照らし給ふ。我らは聖名を称えて聖旨の現はれを仰ぎ靈光に觸れて初めて靈に活きることを得ん。而してのち靈化の光榮を身に口に現すやうに為てミオヤの聖寵に報い奉るべきものと自ら信じて世の同胞衆に御すゝめ申す所以である。

# 人生の帰趣 終

## 辨榮聖者畧傳

編者謹誌

大ミオヤの無盡の大悲に催はされて、此の土に輝き出で給ひし辨榮聖者は、安政六年二月二十日下總國鷲の谷の念佛者山崎嘉平氏の長男に生を受け給ふ。家に在りて農事に勵み學業を好むこと世の常ならず、十二歳の時彌陀三尊を空中に見し、憧懼の念に堪へず、竟に明治十二年二十一歳にして出家の素志を遂げ、近村東漸寺の碩學大康上人に師事し、毎夜熟睡三時間の外は雜用に學問に忙しく、貫くに念佛一行晝夜斷え間なく、或時は手の平に油を入れ之に浸したる燈心を燈し、或時は腕の上に線香や蠟燭を燈して佛前に供へ、以てその忍力佛道修行に堪へ得るやを試し給ふ。東京に遊學して卍山上人に就きて華嚴を修めし央には法界觀の三昧圓かに現前し、明治十五年筑波山に籠りて至心念佛の曉には見佛三昧了々と發得し給ふ。爾來一舉一動全く佛法に相應し、施、戒、忍、進、禪、慧、缺くることなく、大康

上人の意を繼いで五香に新寺創立を志し明治二十七年本堂落成に至るまでは、雨漏る廢家あばらやに夜も燈無ければ線香の火を頼りに聖畫を描き、嚴寒にも重ね着せず薬わらを積んで蒲團となし、超然ちやうぜんとして勇猛ゆうめうに稱名しやうみやうし給ふ。建立こんりやう寄附も一人一厘の結縁けちえんとして遠近あんぎやを行脚も中若し貧窮者に遇へば月日重ねて喜捨きしやを積みし金米全部之に施して更に又一厘かんじんより勸進かんじんを始め給ふ。途を踏むに蟻ありは勿論若草までも憩ねんてろに之を避け、大康上人の訃音ふいんに接しては卽座に追恩別行に入つて不臥ふが念佛一百日に及び給ふ。更に一切經讀了。明治廿七八年印度に渡りて大聖釋尊だいしやうしやくそんの御蹟みあとを巡拜し、歸朝しては東西に巡教し阿彌陀經圖繪あみだきやうずえを施し給ふこと廿五萬餘部、普あまねく米粒名號みようごうを施してかりにも一聲稱名の縁を結び給ふこと實に無數、難化なんげの有縁うえん一人の爲にも數年方便ほうべんして猶措かず、寺の禮遇れいぐうを辭り態々下男室に夜を明して勸化かんげの縁を求め、夜寒の町に貧者を訪れては當日供養をうけし下着を脱ぎ與へて如來の大悲だいひを喜びあひ給ふ。日毎夜毎の傳道に疲れし色もなく忙中ぼうちゆうに僅わずかの閑を得ては如來の尊像教化そんざうきやうけの御文に筆を

運び、汗血のにじむ慈悲の雫が幾千枚、その奉謝の金は悉く會堂の創建となり學園の創立となり數萬の文書數十萬の禮拜儀の施本に充て給ふ。食卓の上浴室の中至る所皆説法の道場にて、一所不住の年中巡教極寒極熱一日の休養もなき間に宿所の縁に随つては古今の書籍近代科學に至るまで孜々として研め給ひ、又畫、歌、音樂、五筆の書等諸技悉く利生の方便ならざるなし。靈應内に満ちて、念々不捨寢息まで自ら稱名する程なりし間にも説法に非れば讀書、讀書に非れば書き物、實に一寸の光陰も爲すこと無くして過し給ふことなく、集る淨財は悉く利他の用に供へて反古紙一枚をも節約してその裏に原稿を書き給ふ。一切の時一切の處、たゞこれ佛作佛行、寸隙なきその御行狀に接しては始め尊大に構へし人も皆恭敬して其の教に類かざるなく、諸宗は勿論耶蘇教の牧師に至るまで發心してその門に入る。首唱し給ふ光明主義の光萬民に被る所、念佛三昧各地に盛に行はれ入信の行者幾萬皆悉く値遇の御恩を感泣して盡未來際の願行に奮ひ立つ。超えて大正九年吹雪に更くる北越

の夜寒身に沁む勸化かんげの旅に老いの御聲に盡きぬ如來の御慈悲を傳へて最後の三昧會まいえを木枯悲しき柏崎かしわざきに導かれ給ひし十二月四日遷化せんげし給ふ。

仰ぎ惟おもんみれば内證はなはだ甚深く外用げゆう亦廣大に、全分ぜんぶん度生どじょうの無我むがの力が無作むさの精進しんじんに顯れ給ふ辨榮聖者の御一生は、如來光明のさながらの反映ましまに在せば、誰か大慈悲の靈應を仰がざらむ。誰か光明の攝化を信ぜざらむ。

仏陀禪那弁榮聖者御著

光明 「人生の帰趣」  
大系

大正十二年六月十八日 初 版

昭和六年二月二十八日 増補第三版

昭和三十九年八月二十日 増補第四版

編 者 田 中 木 又

発 行 者 能 見 寿 作

印 刷 者 重 政 重 職

発 行 所 光 明 会 本 部 聖 堂

兵庫 県 芦 屋 市 六 麓 荘 町 四 三

電 話 芦 屋 (2) 四 九 〇 一 番

振 替 京 都 一 七 一 九 番  
神 戸 二 五 四 七 二 番

版 出 刷 印 第 一 本 製 刷 印

辨榮聖者御入滅七十周年 記念出版

仏陀禪那弁榮聖者御著

光明  
大系 『人生の帰趣』

平成二年七月四日 復刊

編者 田中 木 又

発行者 光明会 本部

発行所 光明会 本部

〒659 兵庫県芦屋市六麓荘町二〇一二〇

電話 〇七九七—22—四九〇一番  
振替 神戸 二—六四番

印刷所 東進印刷工業株式会社

辨榮聖者御入滅七十周年 記念出版

# 御遺稿集刊行目錄

ミオヤの光 四冊一セット

〔既刊〕

光明大系

無量光壽

〔既刊〕

不断光 附 仏法物語

〔既刊〕

無邊光

〔復刻版〕

無礙光・無對光(合本)

〔復刻版〕

炎王光・清淨光・歡喜光・智慧光・不断光(合本)

〔復刻版〕

難思光・無称光・超日月光

〔復刻版〕

人生の歸趣

〔復刻版〕

光明の生活

〔復刻版〕

道詠集

〔復刻版〕

お慈悲のたより 上卷

〔復刻版〕

お慈悲のたより 中・下卷(合本)

〔復刻版〕